

# 昂々溪採集の遺物について

——額拉蘇C（オロス）遺跡出土遺物を中心として——

大 貫 静 夫

## 目次

1. はじめに
2. 昂々溪周辺の遺跡
  - (i) 遺跡の名称について
  - (ii) 昂々溪額拉蘇の位置
  - (iii) 調査研究史
3. 昂々溪周辺の遺物
  - (i) 遺物の同定について
  - (ii) 額拉蘇C（昂々溪俄羅斯（オロス））遺跡出土の遺物
    - (a) 土器・土製品
    - (b) 石器
  - (iii) 五福A（昂々溪砂崗子Ⅲ）他採集の遺物
4. 考察
  - (i) 土器について
    - (a) 額拉蘇C遺跡出土の土器
    - (b) 隆線文土器群について
  - (ii) 石器について
    - (a) 昂々溪新石器時代の若干の石器群
    - (b) 石刃鏃
    - (c) 彫器
    - (d) 石刃
  - (iii) 極東の新石器時代
  - (iv) 生業について
5. まとめ（付 C14年代について）

## はじめに

今回紹介する資料は戦前の1933年（昭和8年）に現在の中国東北地方（旧満州）の齊々哈爾及び海拉爾周辺で駒井和愛、水野清一両氏によって実施された調査に基づくものである。この中には著名な「俄羅斯（オロス）」遺跡も含まれる。その報文は両氏の没後1977年に未定稿のまま「齊々哈爾・海拉爾遺跡」（駒井、水野 1977）として発表されている。しかし、遺物の図及び図版を欠いている。

この調査の概要については古く『北満風土雑記』（水野、駒井、三上 1938）中に触れられ、骨角器が紹介されており、また「北満州の石器時代文化に就いて」（駒井 1939）、「東亜考古学」（駒井、江上 1934）中にも言及されている。

しかし、「俄羅斯」出土の土器、石器の公表は1959年の『考古図編』第17輯（東京大学文学部考古学研究室 1959）が最初であろう。その後、縄文時代草創期の隆線文土器との関連や、北海道の縄文時代早期の石刃鏃との関連で注目されることとなる。前者の関連から、鎌木義昌氏による紹介（鎌木 1966）があり、また、後者の関連から木村英明氏により石器の一部の実測図が公表されている（木村 1976）。

その他の資料は今回初めて報告するものである。本来ならば、「齊々哈爾・海拉爾遺跡」に取り上げられている遺跡の遺物を全て紹介すべきであるが、今回は取り敢えず、この中の齊々哈爾周辺の遺物を紹介するに止どめる。

自然遺物および骨角器については現在研究室に収蔵されている資料の分析を金子浩昌氏に御願っていたが、最近、平井尚志氏より故直良信夫氏の遺稿の存在を知らされた。おそらく、「齊々哈爾・海拉爾遺跡」と共に収録される筈のもので、未発表のまま埋もれていたものである。その結果、現在研究室に収蔵されている資料以外にも重要な資料があったことがその遺稿から判明した。そこで、当初の予定を変更し、故直良信夫氏の遺稿を中心にして金子浩昌氏にその補足と今日的視点からの分析をしていただき、遺稿の経緯は平井尚志氏に記していただくことにした。胎土分析については西田泰民氏に御願いしたので別に御覧願いたい。

## 2. 昂々溪周辺の遺跡

### (1) 遺跡の名称について

昂々溪周辺の遺跡は過去何人かの研究者によって報告されており、1974年の中国の研究者による報告が最も包括的であるが、各々遺跡の呼称が異なる。ここで、その各遺跡名の対応関係をまとめておく（表1）。

この報告が前出の未完の報告書の図版篇の一部としての性格を具えている点からその呼称を踏襲すべきであろうが、遺跡の群在する性格からしてこれらの遺跡のみ駒井、水野の命名にしたがい、

昂々溪採集の遺物について

表1 各報文の遺跡、地点名の対応関係

黒龍江省博物館 (1974)	梁 (1932)	駒井・水野 (1977)	ルカシュキン (1931, 4)	奥田直栄 (1944)	備考
五福 A	第1沙崗	昂々溪砂崗子 第Ⅰ～Ⅲ地点	第Ⅰ地点		
五福 B	第2沙崗	昂々溪砂崗子 第Ⅳ地点			
五福 C	第3沙崗		第Ⅱ地点		1～4号墓
五福 D	第4沙崗		第Ⅲ地点		5号墓
額拉蘇 A					
額拉蘇 B					
額拉蘇 C		俄羅斯 第Ⅰ, Ⅱ地点	第Ⅳ～Ⅵ地点	C地点	

他は現在の中国側の呼称を用いるような不統一なことは今後の研究の妨げになると思われる。正式な報告のないままに日本で遺跡名が流布してしまい、中国ではそれとは無関係に研究が進められて

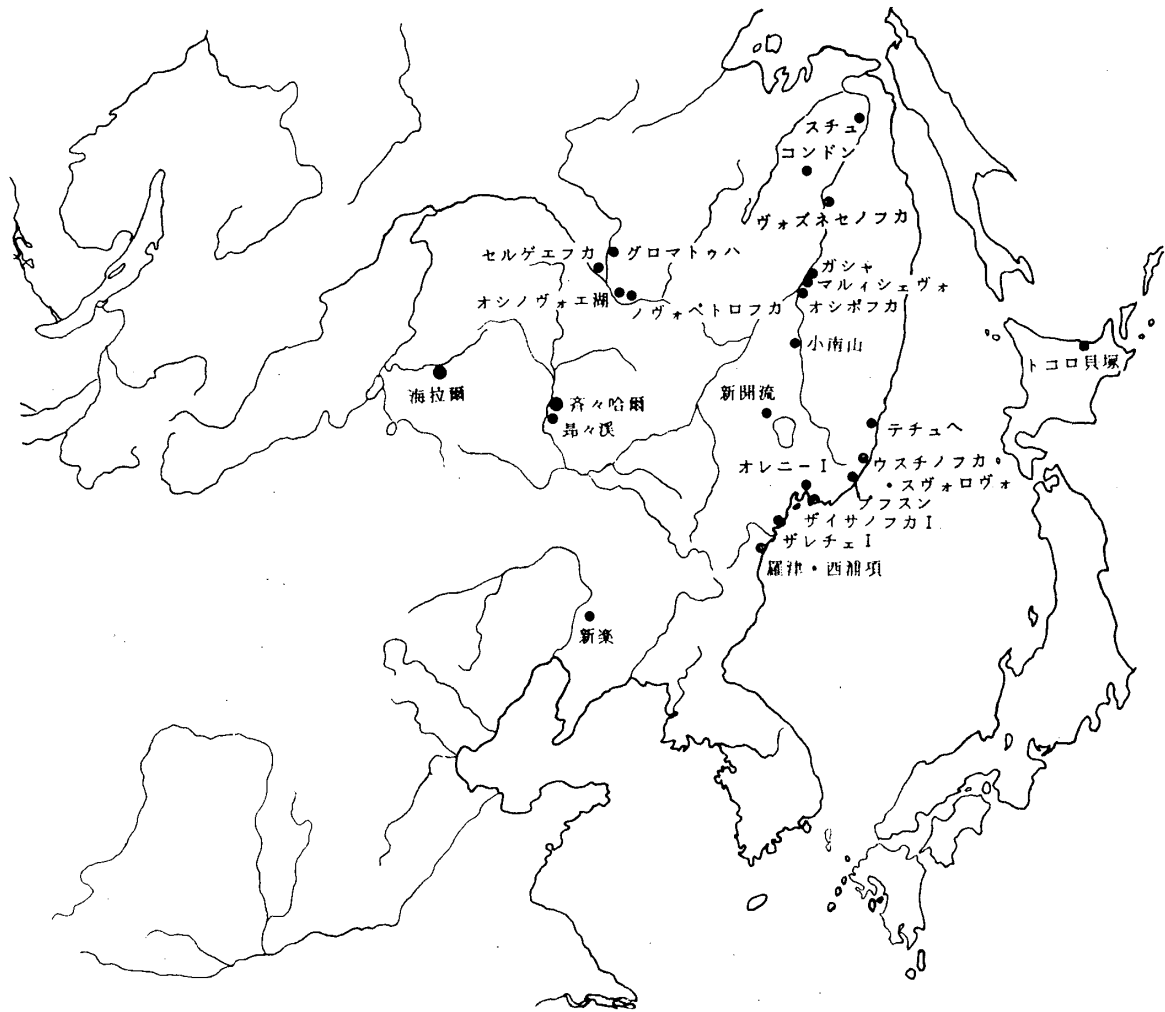


図1 昂々溪および関連する遺跡の位置

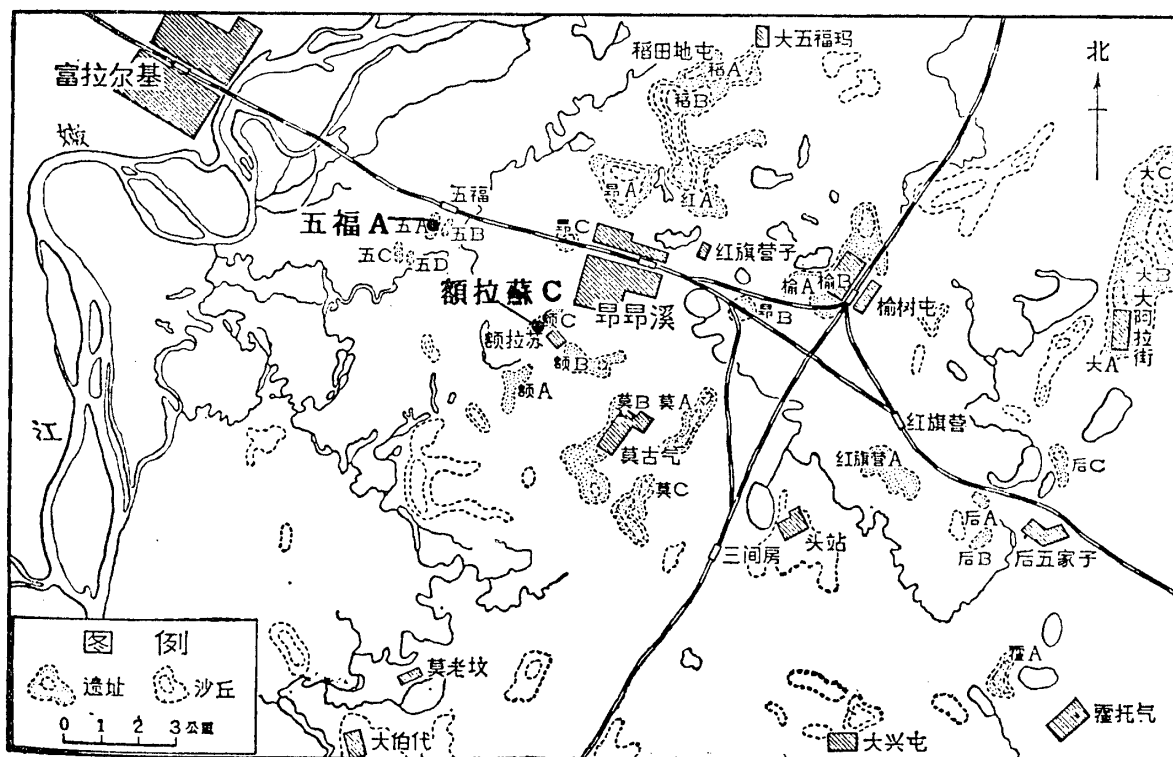


図2 昂々溪周辺の遺跡（黒龍江省博物館 1974一部改）

きたためこのような事態になっているわけである。以下、基本的には現在の中国側の呼称に従うことにする。ただし、地点を示すアルファベットの両側の括弧は煩雑になるので、以下では省略している。

「俄羅斯 (eluosi)」は現在中国側の表記では「額拉蘇 (elasu)」となっている。奥田 (1944) は同一地名の表記法として別に「額拉蘇」があることを記している。1935年大日本帝国陸地測量部発行の地図にも「額拉蘇」となっている。この混乱を避けるため、日本語表記では従来から用いられている「オロス」とするのよいかもわからない。

本遺跡の名称として、調査者自身の関係する文献に「俄羅斯貝塚」と記される場合（東大考古学研究室 1959）もあり、我が国では「俄羅斯（オロス）貝塚」が遺跡名として流布している。しかし、「俄羅斯貝塚」と称するからといって他の砂丘遺跡と異なるわけではない。報文にもあるように、砂崗子の状況も同様であって、特に「俄羅斯」のみを「貝塚」とするのはどうか。戦前に執筆された報告では、「貝殻が二、三ある」（今回の整理ではもう少しある）とされ、慎重に「Kitchen Midden」と呼称し、日本の貝塚との相異を強調していた点を重視すべきであろう。「俄羅斯」を始めとする昂々溪の砂丘遺跡は基本的に表土下の黒色土層を包含層とする遺跡である。筆者の現地踏査でも、どの砂丘遺跡にも土器、石器、獣骨、魚骨、貝殻が散布しており、この遺跡のみを「貝塚」とよぶのは誤解を招きかねない。

また、砂崗子の第Ⅰ～Ⅲ地点は現在五福A遺跡となっており、第Ⅳ地点は現在五福B遺跡となっ

ている。

### (ii) 昂々溪額拉蘇の位置

昂々溪は松嫩平原の嫩江流域に位置する。松嫩平原は湿草地性ステップ黒色土地帯である。平坦な低地が拡がり、大小の河川は夏季に氾濫が繰り返され、沼沢地が発達する(任編 1986)。この中に、小高い丘が点在しており、遺跡はその丘の上に形成されている。大よそ、低地の標高が130m台で、丘の最高部で140m台であり、標高差は10mに満たないようである(図1, 2)。五福地点は四つの砂丘よりなる。額拉蘇地点は額拉蘇の集落をとりまく三つの砂丘よりなる。現在の嫩江の本流は五福Aより半径5km以内にあり、額拉蘇Cよりは半径10km以内にあり、両者は約5kmの距離にある。

### (iii) 調査研究史

ルカシュキンが1928年に第1地点(五福A)を調査し、翌29年に第II地点(五福C)を調査して、1~3号墓(人骨)を発掘している(Loukashkin 1931)。30年には梁思永が第1沙崗(五福A)、第3沙崗(五福C)を調査し、第3沙崗で4号墓(人骨)を発掘している(梁 1932)。ルカシュキンは1932、3年に新たに第III地点(五福D)で5号墓(人骨)を発掘し、第IV、V、VI地点(額拉蘇C)を調査している(Лукашкин 1934)。33年には駒井、水野が今回報告する「俄羅斯」(額拉蘇C)遺跡、昂々溪砂崗子第I~III地点(五福A)、第IV地点(五福B)の調査を行なっている。1940年には奥田直栄がやはり「俄羅斯」遺跡を調査している(奥田 1944)。

戦後は1963、4年に黒龍江省博物館が昂々溪周辺の広範囲な調査を実施している(黒龍江省博物館 1974)。戦前の調査についてはラリチェフが総括している(Ларичев 1960)。

1981、2年には、今まで知られていた黒色土の包含層の下の黄色土から、より古い石器文化の存在が明らかとなったが、その性格は判然としない(黄他, 1984)。

戦前の調査では、人骨に伴う掘り込みが確認されていないため、墓としても、その副葬品の認定には不確実な点もあるが、以下に戦前調査された墓(人骨)についてまとめておく(図15, 16)。

- |     |     |                |                   |
|-----|-----|----------------|-------------------|
| 1号墓 | 五福C | 土器2・石器・骨角器・装飾品 | (Loukashkin 1931) |
| 2号墓 | 五福C | 副葬品なし          | (Loukashkin 1931) |
| 3号墓 | 五福C | 土器1            | (Loukashkin 1931) |
| 4号墓 | 五福C | 土器2・石器・骨角器     | (梁思永 1932)        |
| 5号墓 | 五福D | 副葬品なし          | (Лукашкин 1934)   |

## 3. 昂々溪周辺の遺物

### (i) 採集地の同定について

残念ながら、調査後既に約五十年の年月も過ぎ、また調査者も既に亡くなっており、本報文に掲載した資料全てについてその確実な採集地が判明しているわけではない。これらの資料には当時の

ラベルの付いた袋中にそのまま入っていたものと、その後ケース中に移しかえられたものがある。前者については、そのラベル上の記載により遺跡名が容易に判明するが、問題は後者である。

以下、この問題について若干検討しておく。前述のケース中には更に四つの小箱があり、一箱には「ハイラル西方鉄道南部」と記されている。いま一箱には「俄羅斯貝塚西発掘石器・骨器」と記されたラベルがあるが、現在は獣骨が入っている。別のラベルの無い一箱に、『考古図編』に収録された石器、骨角器、土製品を含み、「俄羅斯」出土品と判断されるものがあつたので、それと入れ替わつたものと推定され、これをK-1資料とする。

他の一箱中には小型磨製石斧(図12-22)、石核(図13-1)、土器片(図11)、および磨製石斧の破片(図13-2, 3)が入っていた。これをK-2資料とする。この中、小型の磨製石斧は報文(駒井, 水野 1977: p. 279)に見える「玉の小斧」に相当すると考えられ、また別に、小箱に入っていないがケース中には「石器及び土器 昂々溪西方砂丘Ⅲ」のラベルもあることから、K-2資料は昂々溪西方砂丘Ⅲ(五福A)採集の可能性が高い。しかし、他に二点の磨製石斧の破片(図13-2, 3)がある点、「磨石器は玉製の小品あるのみ」とある記載(同上: p. 282)と合致しない。従つて、この二片の採集地は別の可能性がある。すると、玉斧、土器は問題ないが、石核も問題があることになる。

西方砂丘(砂崗子)Ⅳ地点(五福B)では遺物を採集していないから無視してよいが、齊々哈爾葫蘆頭が問題となろう。ここからは「石核、石鏃、石刃、石匙」が採集されている筈(同上: p. 277)だが、収蔵資料中に確実なものは見あたらない。K-2資料の石核(図13-1)がそれに相当するのだろうか。しかし、磨製石斧に関する記載はない。石核が葫蘆頭採集のものとするれば、K-2資料は別遺跡のものが混入していることになる。

他の二箱については更に大きな問題がある。この中の一箱には「ハイラル西方鉄道南部」のラベルが入っており、齊々哈爾周辺の「俄羅斯」や「砂崗子」採集の石器と同類の石器を含んでいる。これをKG-5資料とする。別の一箱にはラベルが無く、採集地が不明になっているが、細石刃を多く含んでいる。これをK-3資料とする。これは、今回未報告の海拉爾近傍の Honedokt, Soghu(同上)の資料と類似する<sup>1)</sup>。

もし、「ハイラル西方鉄道南部」の資料(KG-5)の採集地が正しいとすると、海拉爾において、Honedokt, Soghu の様な細石核、細石刃を主体とする石器群とは別に、「俄羅斯」とほぼ同様の資料が海拉爾にも存在することになる。はたして、事実是这样だろうか。

K-3資料中には無文の土器小片が一片あるが、その胎土は「俄羅斯」や「砂崗子」(K-2資料)とは異なり、海拉爾の Honedokt の土器に近い。また、石材も近い。また、「昂々溪西砂崗子」の資料は当時のラベルの付いた袋が二袋(図12-1~21)残っていて、No. 1, No. 5となっており、Nos. 2~4の袋が無い。これらの資料はどこに行つてしまつたのであろうか。K-2資料だけではこれを充足することはできないと思われる。

以上から、KG-5資料は実際は「昂々溪西砂崗子」のものではないかと推定するにいたつたが、

#### 昂々溪採集の遺物について

同様に齊々哈爾葫蘆頭採集の可能性を考慮しなければならない。図14—1が報文の石鏃に該当するのであろうか。K—3資料は「ハイラル西方鉄道南部」の資料と推定する。

この様な資料操作を経て、以下遺跡別に紹介してゆくことにしたい。調査の詳細は報文（駒井、水野 1977）に譲る。

#### (ii) 額拉蘇C（昂々溪俄羅斯（オロス））出土の遺物（図3～10，図版1～10）

遺物の中、土器は文様あるものの殆どを掲載し、土製品及び石器については全てを掲載した。

#### (a) 土器（図3～5，図版1～5）

文様は全て隆線文である。断面三角形の隆線の貼り付けを基本としている。刻み或いは押捺により一部連鎖状または波状になる。全形を窺い知る例はないが、各部位の破片から推定して、また、無文の胴部片もかなりあるところから、隆線文の殆どは胴上半部に限定されるようだ。器形については不明の点が多いが、全て平底で口縁が直立気味のものが多く底部片では大きく外反するものが多いから、新開流遺跡の隆線文土器（図18—4）を想起させるものが中心であろう。図3—5，6，10，11の同一個体と見られるもののように、胴部で大きく屈曲するものもある。同一7は広口壺かと思われる。同一16，19のごとく、小型で器壁が薄手で外反するものがあり、碗あるいは浅鉢を思わせるものがある。

色調は黒灰色から暗黒褐色のものまでであるが漸移的である。胎土は殆ど全てにわたって白色の貝殻の粉末が混じっている。砂粒は殆ど混じらず、泥質の胎土である。また、細孔のあるものもあるが、その成因は不明である。

器壁も硬質のものから軟質のものまでであるが、これも漸移的である。器表面の、特に内側が剥落したものが多い。器面には隆線を貼付けした部分はその相互の裾部が連結して、全面に薄く化粧がけしたようになっており、他の無文部も化粧がけしたように滑らかな泥質の器面になっているものが多い。接合部には擬口縁になるものがある。

以下、各部位別にみてゆく。

口縁部（図3—1～9，12，14～19）の殆どは口唇が肥厚するものである。この中、5，6（同一個体とみられる）の口唇部は押捺のある隆帯様になっている点、他と異なる。横走する隆線の下位2条にも押捺が施される。10，11もこれと同一個体かとみられるが、それが正しいとすれば、胴部が屈曲し以下に斜行する隆線をもつことになる。多くは肥厚する口縁のやや下から横走する貼り付け隆線をめぐらす、その上位1条乃至2条の隆線に刻み（4）や押捺（1～3，15）を施し連鎖状にするものがある。口縁を欠くが、13，20も刻みある仲間である。この種の土器はその横走隆線の下位1条乃至2条に再び刻み乃至押捺を施すようである。第4図27～30はこの種の刻みある例である。

また、横走する隆線上位に刻みや押捺を施さない一群がある（図3—8，9同一個体？），14，16）。胴部片にも横走する隆線下位に何も施さず、以下無文になるもの（図4—19，31～37）があるが、この種の胴部片かもしれない。この中、33は更に下に続く可能性がある。36，37は同一個体

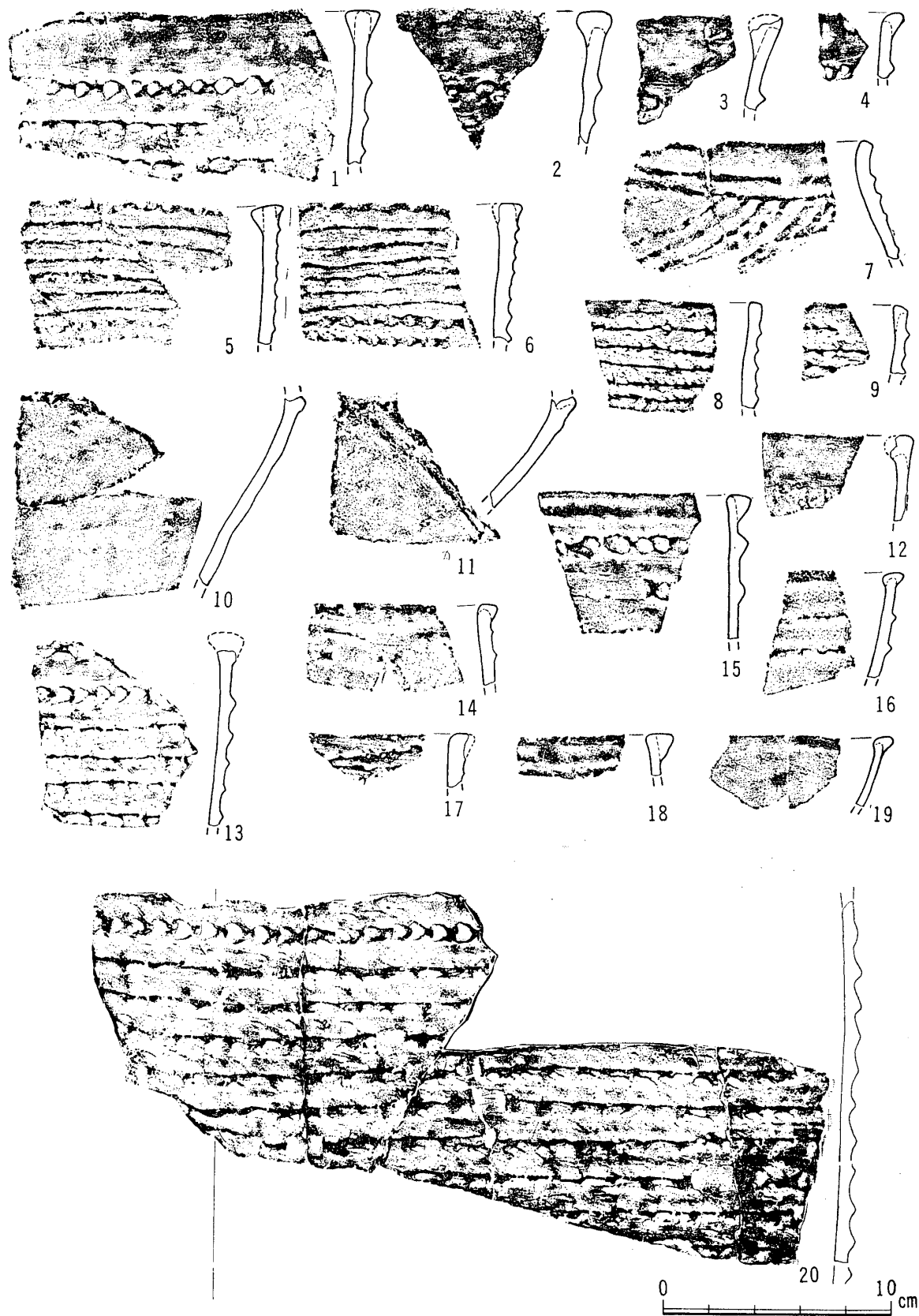


図3 額拉蘇C出土の土器 (1)



昂々溪採集の遺物について

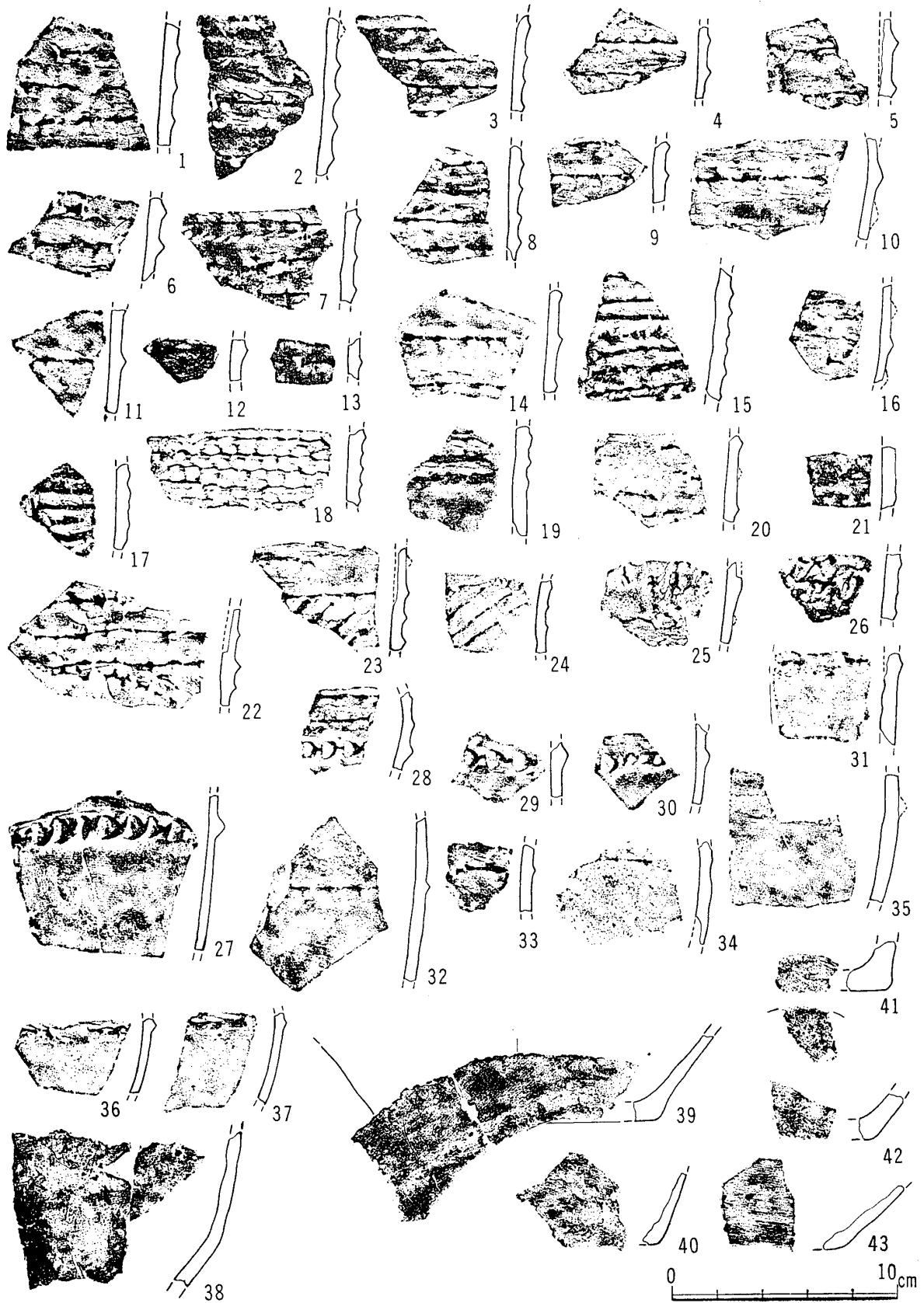


図4 額拉蘇C出土の土器 (2)

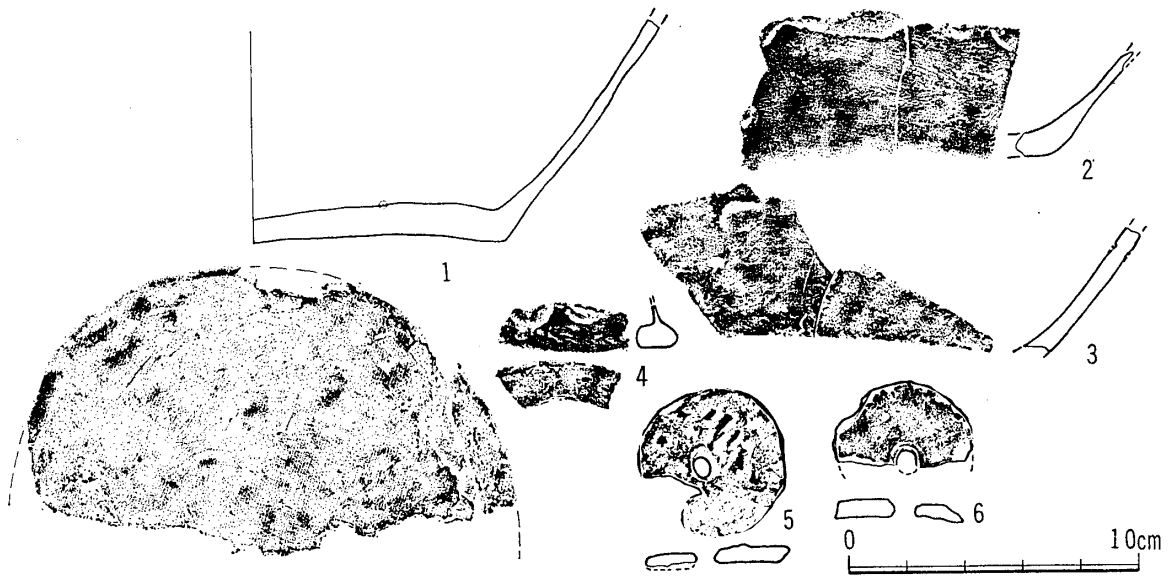


図5 額拉蘇C出土の土器(3)・土製品

と見られる。

以上のような土器の胴部上半の横走する隆線と見られるものが多数ある(図4—1~21)。この中、1、2及び3、4はそれぞれ同一個体かと思われる。

隆線には接着の際の指頭圧痕が残り、極めてゆるやかな波状を呈すものが多い。

以上の様な単純な横走する隆線の他に、少量、斜行したり縦走したり、波状を呈す一群がある。

斜行する例としては、図3—7の口縁部例が挙げられる。他に胴部片としては図4—22~24の例がある。前述した図3—11もこの仲間を含められよう。横走する隆線と組合う。

縦走する例としては図4—25が上げられる。上下左右は不詳だが、図に従えば4条の縦走する隆線と横走する1条(下端に更に1条の痕跡がある)の隆線が認められる。

波状を呈する例としては図4—26が挙げられる。これは前述の指頭による接着の際生じたものとは区別される。

胴部下半は無文になり、なだらかに底部に移行する例が多かったようだ。但し、図3—10、11の例や、図4—38の様に屈曲する器形も多少あったようだ。

底部は全て平底である(図4—39~43、図5—1~3)。概して、底への屈曲部は丸味を帯びている。図5—1は鋭く屈曲する。底はやや不整な円形である。

(b) 土製品(図5—5、6、図版10)

有孔円盤がある。5は隆線文を有する土器片を加工したものである。一部欠損し、器表面も一部剥落している。周縁部は磨かれている。器表面の隆線も磨耗して(磨かれて?)いる。孔は中心からずれて、両面より穿けられている。孔は楕円形を呈す。現存で、10.80g。6は約半分を欠損する。周縁部は打ち欠かれたままで、磨かれていない。孔は両面より穿けられている。現存で、

昂々溪採集の遺物について

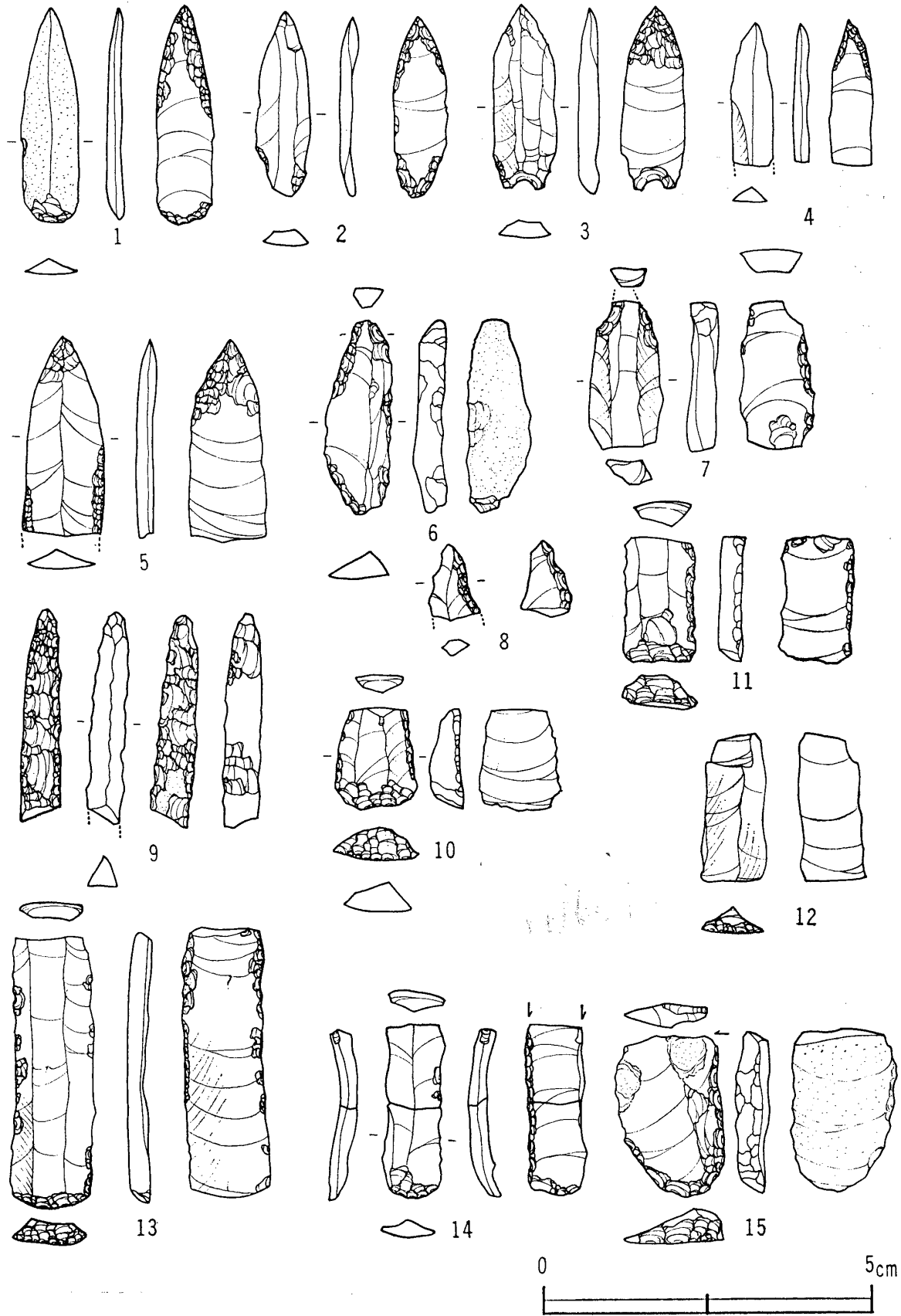


図6 額拉蘇C出土の石器 (1)

大貫 静夫

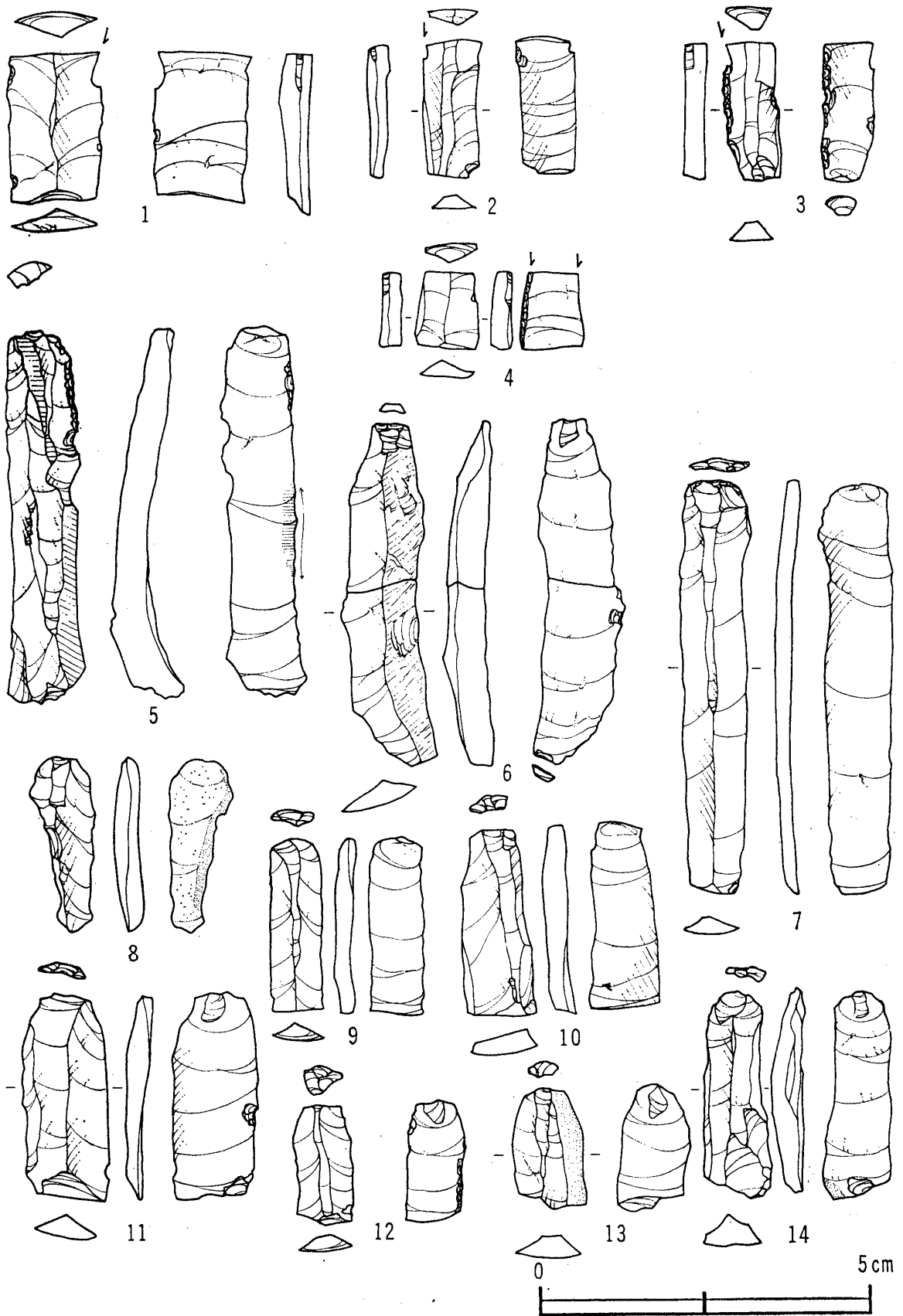


図7 額拉蘇C出土の石器 (2)

昂々溪採集の遺物について

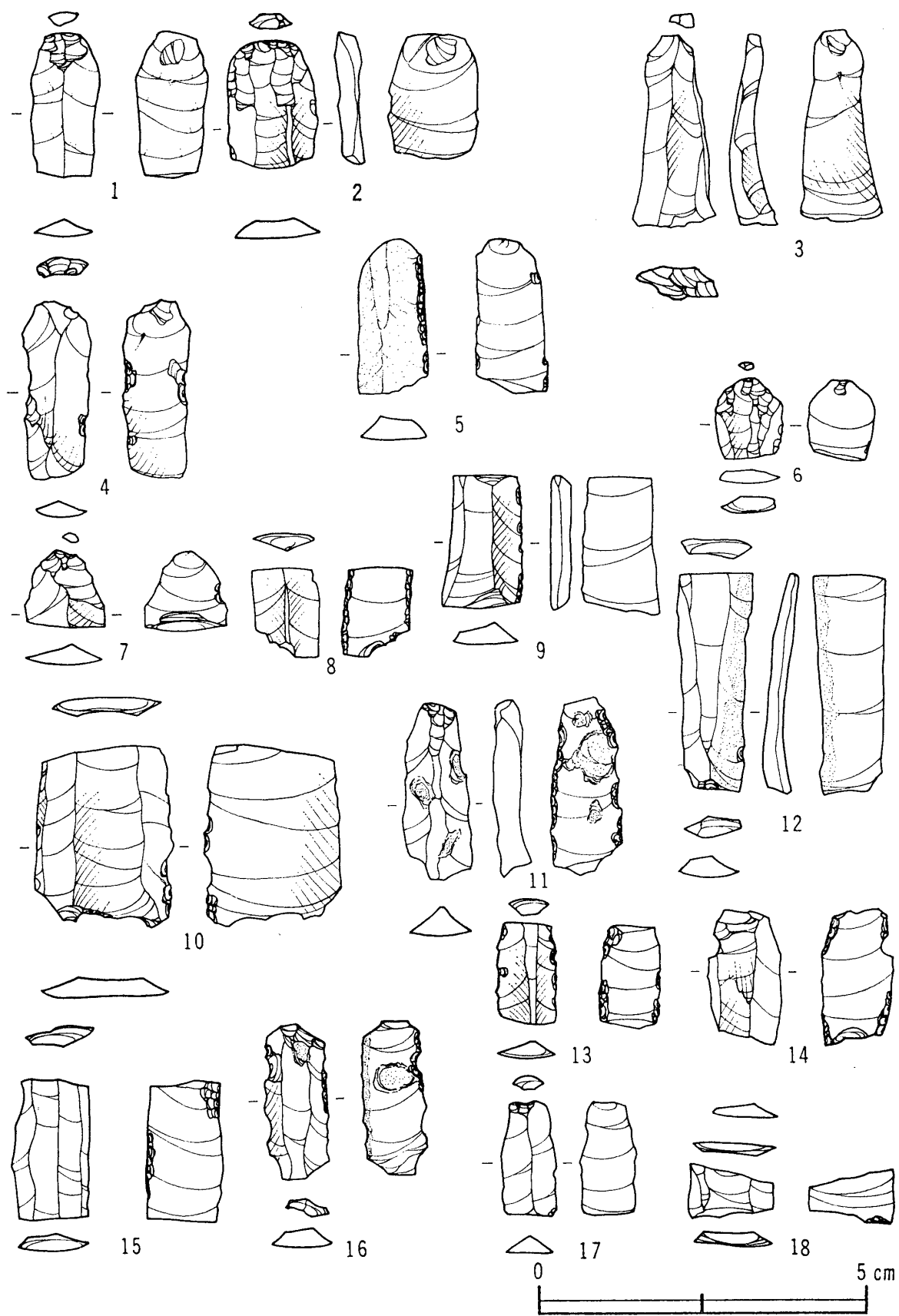


図8 額拉蘇C出土の石器 (3)



図9 額拉蘇C出土の石器 (4)

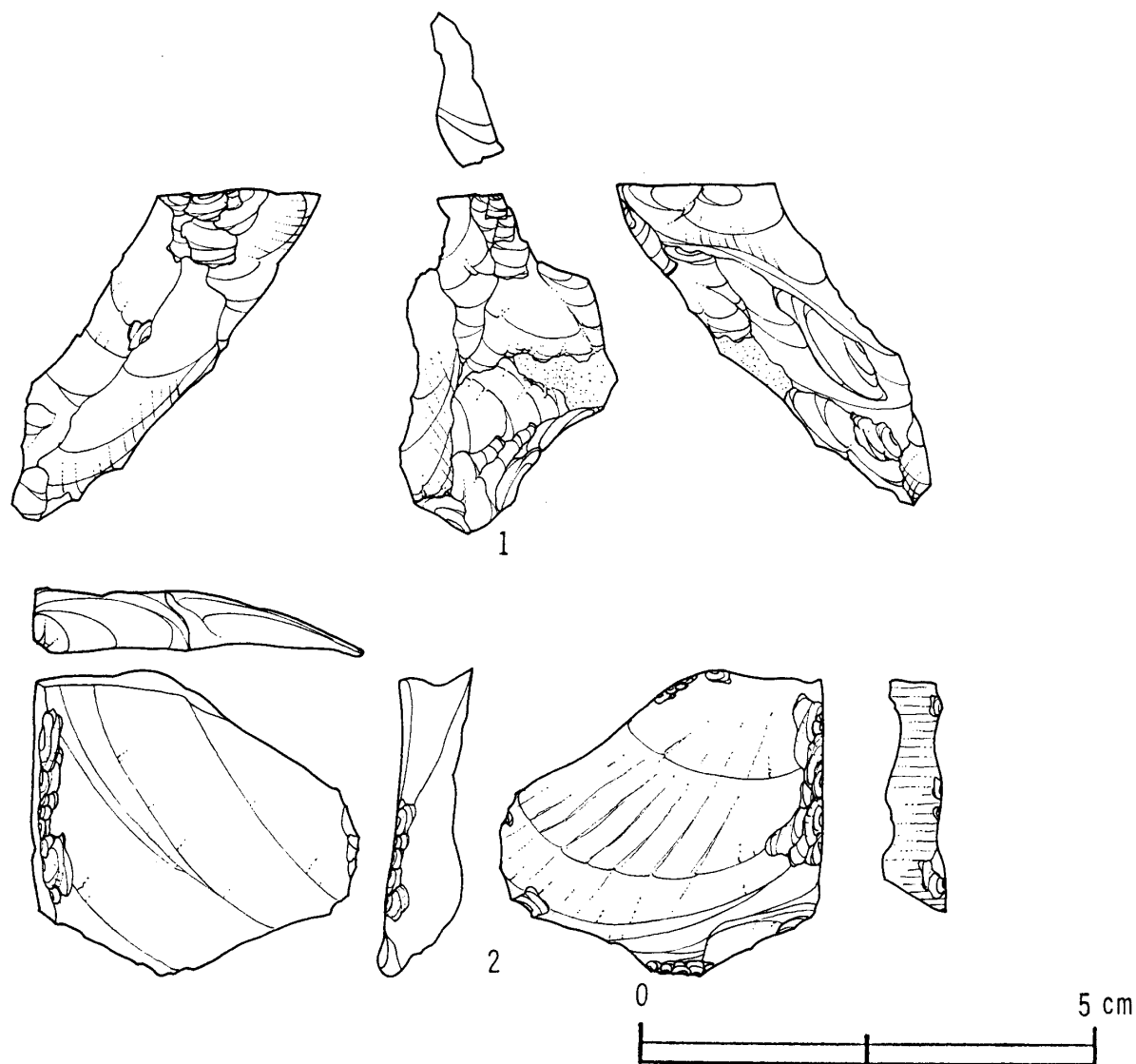


図10 額拉蘇C出土の石器 (5)

7.65 g。

図5—4は土器の口縁と考えるには器壁が薄すぎ、口径も小さすぎるため、何らかの土製品かもしれない。

(c) 石器 (図6～10, 図版6～9)

石器の素材としては石刃が多用されている。幅は1cm前後のものが多く、完形品(図7—5～7)を見ると、長さ5, 6cm前後のものである。基本的にはこれを三分割して、中央部を利用したものであろう。石刃および石刃を素材とする石器の観察結果を表2, 3に示した。石材は碧玉が殆どである。

大貫 静夫

表2 額拉蘇C遺跡出土の石刃石器及び石刃(1)

	図番号	器種名称	長	幅	厚	二次加工刃こぼれ	打面			頭部調整	備考
							幅	厚	剝離面		
1	6-1	石刃 鎌	32.5	8.5	2						背面全面 石灰付着
2	2	〃	28	8	2						
3	3	〃	27.5	9.5	2.5						
4	5	〃	30.5	11.5	3						
5	4	錐 (?)	22	6	2.5						両面 石灰付着
6	8-14	石刃鎌 (?)	20.5	11	2						
7	6-6	錐	29.5	9.5	4.5						腹面 石灰付着
8	7	〃	22.5	11	4		7	3	単	ナン	
9	8	〃	11.5	7	2						
10	10	端削器	15	12.5	4						
11	11	〃	19	11.5	4						
12	12	〃	22	8.5	3						
13	13	〃	41	12	3						
14	15	彫器・削器	24	15	5						
15	14	彫器	26	8	2						
16	7-1	〃	22	14	3.5						
17	2	〃	21	8	2.5						
18	3	〃	21	8	3		4.5	2.5	単	ナン	
19	4	〃	11.5	9.5	3.5						
20	5	石刃(完)	55	11	6	R L'	5.5	2.5	単	アリ?	
21	6	〃	51	11.5	4		4	1	単	アリ	光沢のある 使用痕
22	7	〃	61	9.5	2		5	1	複	アリ	
23	8	石刃(頭)	25.5	7.5	4		5	2	複	アリ	腹面全面 石灰付着
24	9	〃	26	7.5	2.5		6	2	複	ナン	
25	10	〃	28	10	4		6	2	複	ナン	
26	11	〃	30	12.5	3		6.5	1	複	ナン	
27	12	〃	18	9	4	L'	5.5	4	複	ナン	
28	13	〃	18	10.5	3		4.5	1	複	ナン	
29	14	〃	31	10	4.5		6	1.5	複	ナン	
30	8-1	〃	21	10	2.5		4.5	2	単?	アリ	打面部 石灰付着

数値の単位はmm, R, Lは背面の右, 左。R', L'は腹面の右, 左。



昂々溪採集の遺物について

表3 額拉蘇C遺跡出土の石刃石器及び石刃(2)

図番号	器種名称	長	幅	厚	二次加工刃こぼれ	打面			頭部調整	備考	
						幅	厚	剝離面			
31	8-2	石刃(頭)	20	13.5	3.5	L	8	2.5	複	アリ	背面石灰 付着
32	3	"	29	12.5	3		4.5	2	複	ナシ	
33	4	"	28	10.5	3		8	2.5	複	ナシ	
34	5	"	24	10.5	2.5	R'L'	3	1	単	ナシ	
35	6	"	12.5	10	2.5	R'L'	2	1	複?	アリ	
36	7	"	11.5	11.5	3.5		2.5	0.5	単	アリ	
37	11	"	22	10.5	5	R'L'	4	1.5	単	アリ	
38	17	"	17	8.5	3		5.5	2	複	アリ	
39	8-8	石刃(胴)	13.5	10	3	R'L'					
40	9	"	20.5	12.5	3	R					
41	10	"	28	21	2.5						
42	12	"	33	11.5	3.5						
43	13	"	16.5	9	2.5	RR' L					
44	15	"	21	11	3	R'L'					
45	16	"	24	10	2.5	R'L'					
46	18	"	8.5	13	2						
47	9-1	"	15	8	3	R'					
48	2	"	12	9.5	2.5						
49	7	"	31	14	3						
50	9-4	石刃(尾)	27	14.5	6.5						
51	5	"	20	8.5	2.5						
52	6	"	50	12.5	5	R'L					

石刃鏃はその基部形態が多様である。図6-1~3は完形で、5は基部を欠く。4は他に比し細身で、シルカ洞穴の報文(Okladnikov 1960)で鏃と分類されているものに相当する。図8-14は両端を欠損するが、その二次調整は石刃鏃のものかと思われる。

図6-6~9は鏃と見られるものである。6~8と9に分かれる。6~8は石刃の一端を尖らすもので、7は先端を欠き、8は先端部片である。6の腹面のほぼ全面に石灰質のものが付着している。9は先端が磨耗している。

図6-10~15は端削器と見られるものである。15は幅広の剝片を用いる点で異なる。14には両側に刻打がある。15も横位の刻打がある。15は腹面全面に石灰質のものが付着している。

図7-1~4は切断した石刃の側縁に刻打を施す彫器である。4は両側に施される。

表4 額拉蘇C出土の石刃の左右性

	完 存 (20~22)	頭 部 (23~38)	胴 部 (39~49)	尾 部 (50~52)
点 数	3	16	11	3
二次加工ないし 刃こぼれの部分	RL' 1	RL' 2 R' L' 1 L 1 L' 1	RR' L 1 R' L' 2 RL' 1 R 1 R' 1	R' L 1
	1	5	6	1
	0-1-0	2-3-0	0-4-2	0-1-0
	2 — 9 — 2			

石刃として分類したものには完存品3点(図7-5~7), 頭部片16点(図7-8~14, 8-1~7, 11, 17), 胴部片11点(図8-8~10, 12, 13, 15, 16, 18, 9-1, 2, 7), 尾部片3点(図9-4~6)がある。尾部片が少ない。

二次加工あるいは刃こぼれのあるものについては表2, 3で打点部を上にして背面側から見て, 背面右, 左にあるものをR, Lとして, 腹面右, 左にあるものをR', L'として示してある。内訳は完存品で3点中1点。頭部片で16点中5点。胴部片では11点中6点で, 最も比率が高い。尾部片は3点中1点ある。以上, 全体では33点中13点, 約4割にあたる。これを表4に示す。背腹の区別を無視すると, 全体で13点中, 左右にあるものは9点, 右側のみは2点, 左側のみも2点ある。これを2-9-2と表す。植刃として用いられた可能性の少ない完存品, 尾部片は各1点で, 左右あ

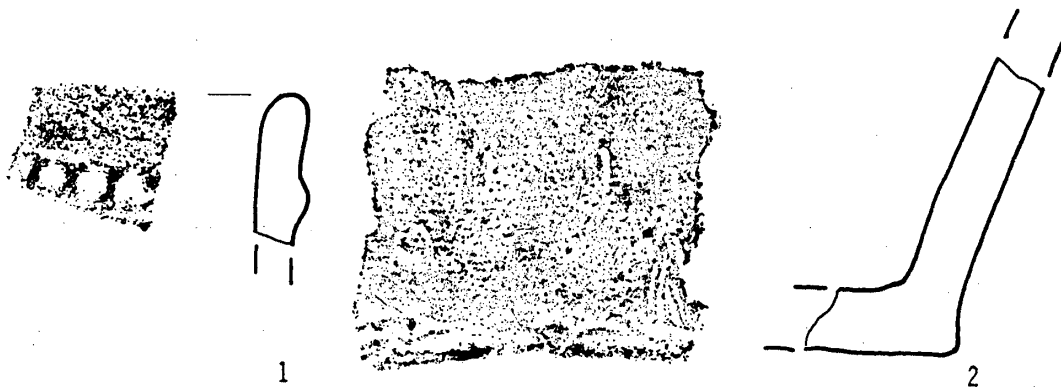


図11 五福A採集の土器 (1/1)

昂々溪採集の遺物について

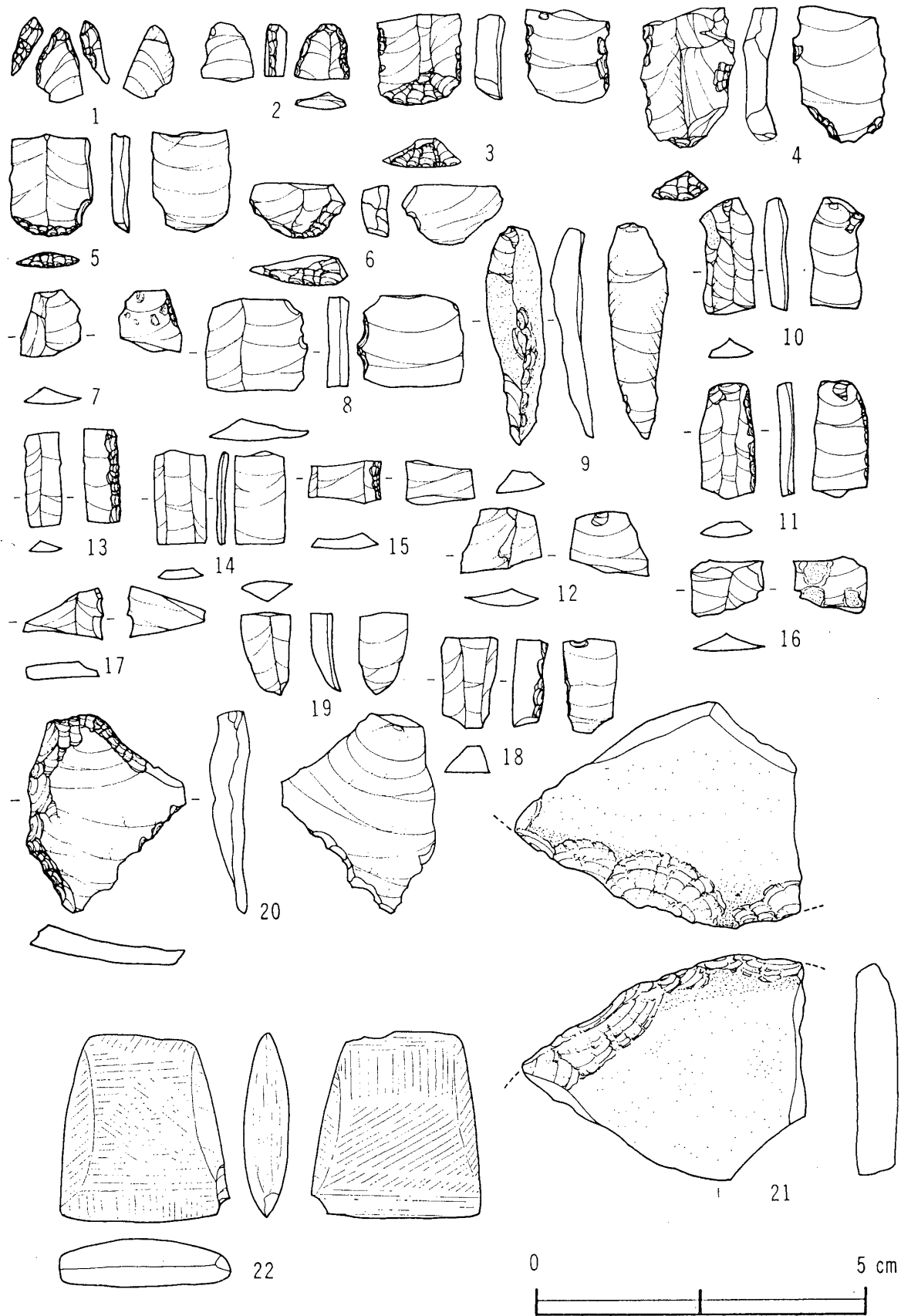


図12 五福A採集の石器

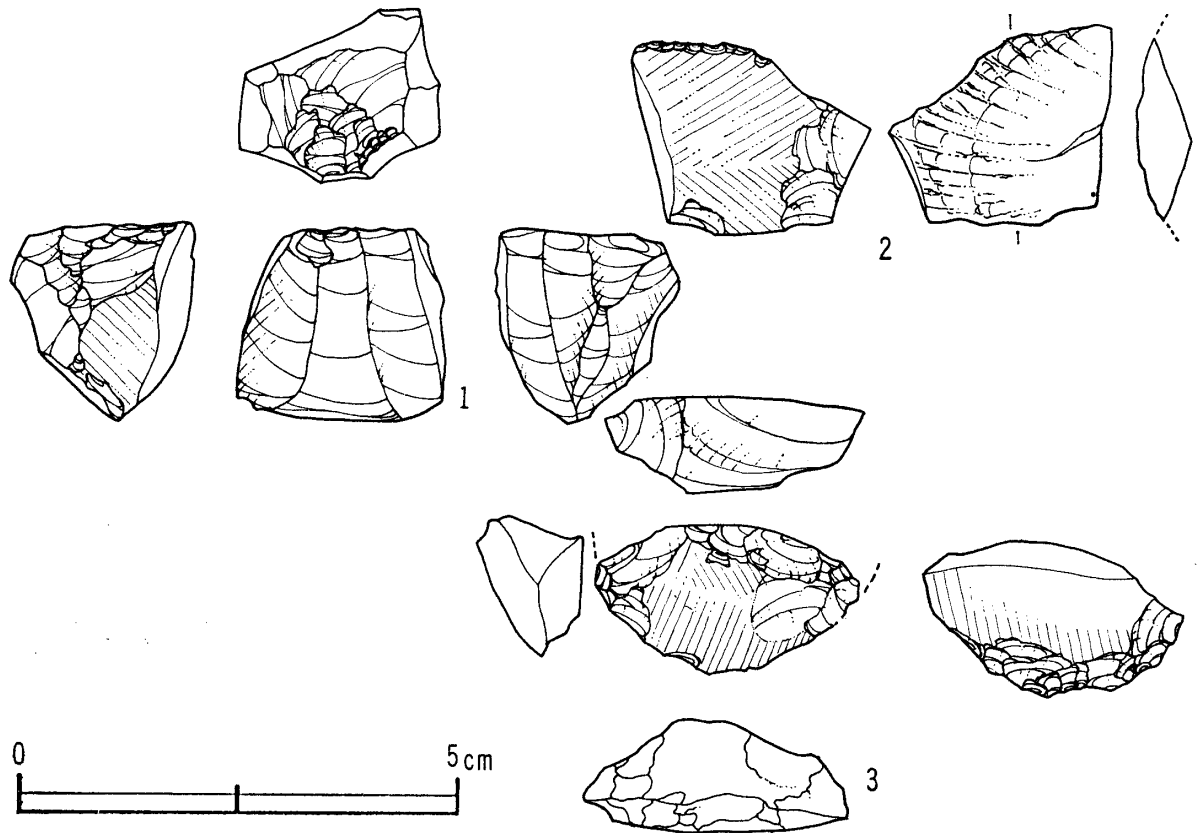


図13 採集地不明の石器

るものであるから、それほど数値に変動はない。この結果、全体として偏りが認められない。敢えて差異を挙げれば、頭部は2—3—0で、胴部は0—4—2で、偏りが認められるが、点数が少なく有意であるか明らかでない。

図9—3は不定形な剥片の破損品と見られる。

図9—10は大型の縦長剥片である。両側縁に刃こぼれがある。

図9—8, 9, 11, 12は小型の不定形な剥片である。11には刃こぼれがある。

図10—1は部厚い不定形の剥片である。

図10—2は幅広の剥片で、右側の打点を打ち落としている。上端の表裏に加工があり、下端の刃こぼれ(?)部は磨耗している。

(iii) 五福A (昂々溪砂崗子) 他採集の遺物 (図11~14, 図版11~13)

確実に五福A採集のものは、図12の石器である。図11の土器もほぼ五福A採集と見られる。図13のK—2資料, 図14のKG—5資料は前述のごとく、齊々哈爾葫蘆頭採集の可能性があり、資料的には劣る。石器実測図はKG—5の一部を欠くが、図版には全て示した。

(a) 土器 (図11, 図版11)

昂々溪採集の遺物について

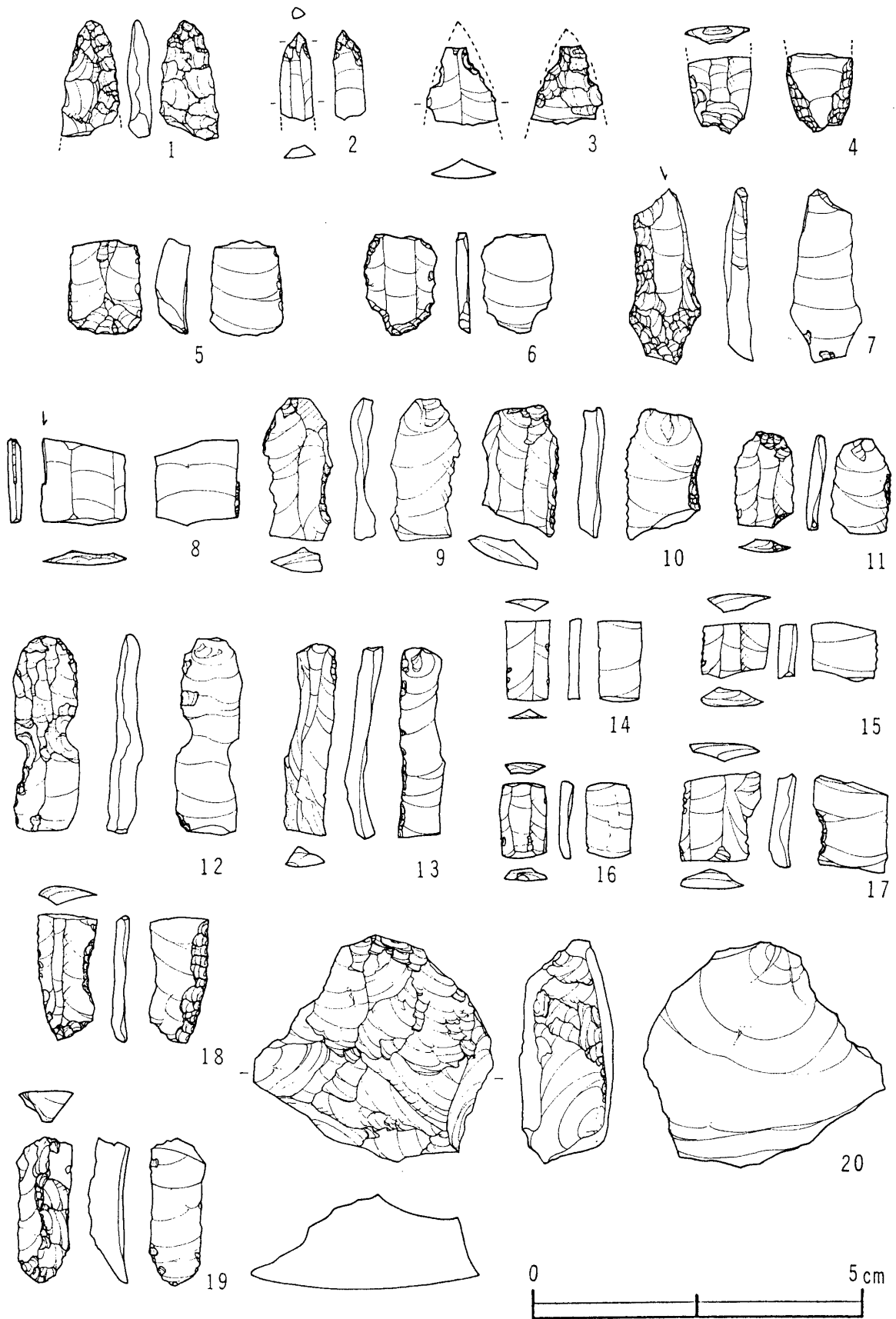


図14 採集地不明の石器 (2)

大貫 静夫

表5 五福A遺跡他採集の石刃石器及び石刃(1)

No.	図番号	器種名称	長	幅	厚	二次加工刃こぼれ	打面			頭部調整	備考
							幅	厚	剝離面		
1	14-3	石刃鏃(?)	11	10.5	2.5						KG-5
2	4	〃	11	9.5	2						〃
3	2	錐	13	5	1.5						〃
4	12-2	尖頭器	8	8	2.5						
5	3	端削器	13	12.5	3.5						
6	4	〃	20	14	3.5						
7	5	〃	15	12	2						
8	6	〃	7	14.5	4						
9	14-5	〃	13	10	5						KG-5
10	6	〃	14.5	10	2						〃
11	8	彫器	12	12	2						〃
12	12-9	石刃(完)?	32.5	9	5		3	1	複	ナシ	
13	7	石刃(頭)	8.5	9	2	L'	4.5	2	複	ナシ	
14	10	〃	16	8	2		6	2	複	アリ	
15	11	〃	18	7.5	2	RL'	4	1.5	複	アリ?	
16	12	〃	9	12	3						
17	14-9	〃	22	10	3	R	3	1	単	ナシ	KG-5
18	10	〃	19	11.5	3	RL'	7	1.5	複	アリ	〃
19	11	〃	14	8.5	2	RL'	4	1.5	単	アリ	〃
20	12	〃	28.5	9.5	3.5	RL	4.5	1	複	アリ	〃
21	13	〃	29	7	3.5	RR'	5	2	複	ナシ	〃
22		〃	12	10	2		2	1	単	ナシ	〃
23		〃	11.5	9	1.5		7.5	1.5	複	ナシ	〃
24		〃	10	10.5	2		6	2	複	ナシ	〃
25		〃	18	11	2		5.5	2	複	ナシ	〃
26		〃	19.5	9	3		5.5	2	単	アリ?	〃
27		〃	12.5	10	3.5	R	2	2	複	ナシ	〃
28	12-8	石刃(胴)	14	15.5	3	R'					
29	13	〃	14.5	5	1.5	L'					
30	14	〃	14.5	7.5	1						

昂々溪採集の遺物について

表6 五福A遺跡他採集の石刃石器及び石刃(2)

	図番号	器種名称	長	幅	厚	二次加工刃こぼれ	打面			頭部調整	備考
							幅	厚	剝離面		
31	12-15	石刃(胴)	6.5	11	2	R					
32	16	〃	8	11	2						
33	17	〃	7.5	—	2	R					
34	18	〃	13.5	8	4	R					
35	14-14	〃	12	7.5	1.5						KG-5
36	15	〃	10	8	2						〃
37	16	〃	11	7	1.5						〃
38	17	〃	13	12	2.5	R'					〃
39		〃	11	9.5	1.5	R					〃
40		〃	18	11	2						〃
41		〃	12	14	3.5						〃
42	12-19	石刃(尾)	7.5	7.5	3						
43	14-18	〃	19	8	9	RL'					KG-5
44	19	〃	22	8	4.5						〃
45		〃	10	10.5	2.5						〃
46		〃	15	8	2						〃
47		〃	11.5	9	1.5	R					〃

2点ともK-2資料である。共に、裏面に「表」の注記がある。灰褐色を呈し、砂質で硬い。口縁部の隆線は断面かまぼこ状で、凹点がある。2の底部片は淡褐色を呈し、砂を含むが外面はよく研磨されている。総じて、胎土、焼成、施文ともに額拉蘇Cとは異なる。皆小型の土器の破片である。

(b) 石器 (図12~14, 図版12, 13)

図13のK-2資料, 図14のKG-5資料は前述の理由により別遺跡とすべきものかもしれない。観察結果を表5, 6に示す。

石材は碧玉を主体とし、その石器組成も額拉蘇Cとよく類似する。図12-1, 2は錐の先端部と見られる。3~6は端削器である。20の削器は両側縁に加工があるが、下辺は刃こぼれであろうか。21は打製の円盤形石器の破片であろう。砂岩質のものである。用途不明だが、この地域ではよく出るものらしい(Лукашкин 1934)。22は緑色軟玉製の小型磨製石斧である。

図13-1の石核は最終剝離面では約2cmの長さで幅7mm位のものしか取っていない。3は黒色頁岩製の磨製片刃石斧の破片。2も同材で、磨製石斧の破片であろう。

図14, 図版13のKG-5資料も石材は殆ど碧玉である。1は大型の両面加工の石鏃の尖頭部片。

大 貫 静 夫

表7 五福A他採集の石刃の左右性

	完 存 ? (12)	頭 部 (13~27)	胴 部 (28~41)	尾 部 (42~47)
点 数	1	15	14	6
二次加工ないし 刃こぼれの部分		RL 1	R 4	RL' 1
		RL' 3	R' 2	R 1
		RR' 1	L 1	
		R 2		
	L' 1			
	0	8	7	2
	0-0-0	1-4-3	1-0-6	0-1-1
		2 — 5 — 10		

2は錐。3, 4はそれぞれ石刃鏃の尖頭部, 基部と見られる。5, 6は端削器。7は垂直に近い刻打を施した彫器。額拉蘇Cに見られないタイプであるが, 乳白色の石材で他と異なり, 同時期か疑問が残る。8は額拉蘇Cと同様の彫器。12は両側にノッチが入る。19は石核の初期調整剥片。20は大型の厚い剥片。

石刃は多少問題もあるが一括して扱い, 額拉蘇Cと同様の処理を行なう(表7)。

石刃?の完存品は初期調整剥片の1点のみ。頭部片15点, 胴部片14点, 尾部片6点である。尾部片が少なく, 額拉蘇Cと同様である。石器の素材としての差を示すのであろう。計36点中, 二次加工ないし刃こぼれのあるものは17点で, 約5割を占める。頭部片では15点中8点で, 左右は1-4-3でやや右に偏る。胴部片は14点中7点で, 左右は1-0-6で右に偏る。尾部片は6点中2点で, 左右は0-1-1。全体でも2-5-10となり, 右に偏る。

なお, KG-5のみではそれぞれ, 0-3-3, 0-0-2, 0-1-1で, 全体では0-4-6である。五福Aのみでは, 1-1-0, 1-0-4, 0-0-0で, 全体では2-1-4である。

額拉蘇Cとは異なる様相を示すが, その資料の一括性に問題があるため, 同列に比較できない。しかし, 全てが同一の傾向を示さないことは注意してよい。

ルカシュキンの調査(Лукашкин 1934)によれば, 現在の五福A地点で石刃鏃が多く出ており, その五福A地点のみに出土が限られるもの, あるいは多く出るものとして, 他に貝殻混り隆線文土器, 磨製石斧, 彫器, 石製円盤, 円錐形などの(細)石核等があげられている。もし, そのような在り方が本来のものとするれば, 以上の資料は額拉蘇Cの資料を補完するものとなる。



表8 網目文土器の分布 (佐藤 1983に小野1972を追加)

中央蒙古	東部蒙古	熱河	北満
ジャバラック・ウス	東スニトC 東スニト東北 オールドン・トロガイ ハラコーベD ハイラル	林西 五分地	昂々溪?

#### 4. 考 察

##### (i) 土器について

昂々溪周辺の土器の編年についてはいまだにあきらかとなっていない。趙、楊(黒龍江省博物館 1974)は所謂細石器文化、昂々溪文化を前期、後期に分けた。後期はその後明らかとなった青銅器を伴う白金宝類型に関連するので、

ここでは扱わない。前期は五福Cの4号墓を代表とするもので、更に石材や石器の組成の違いから、碧玉を主とする莫古気Aと、石髓を主とする額拉蘇Aの二者の区別があることを指摘した。その解釈について何も言及していないが、おそらく、時期差を示すものであろう。石槍が多く、石刃製の錐を主体とする莫古気Aがより古い様相を示している。しかし、土器には両遺跡に共通するものがあり、それぞれの遺跡が単一の時期のものか明らかではない。

ただし、額拉蘇Aに最も多い灰褐泥質陶には三角押捺文、隆線文、沈線文、爪形文が施されており、額拉蘇Cとは異なる様相として注意すべきであろう。

五福Cの3、4号墓の土器(図15—3~5)は伴う石器が明らかではなく、1号墓(図15—1、2、図16)は土器

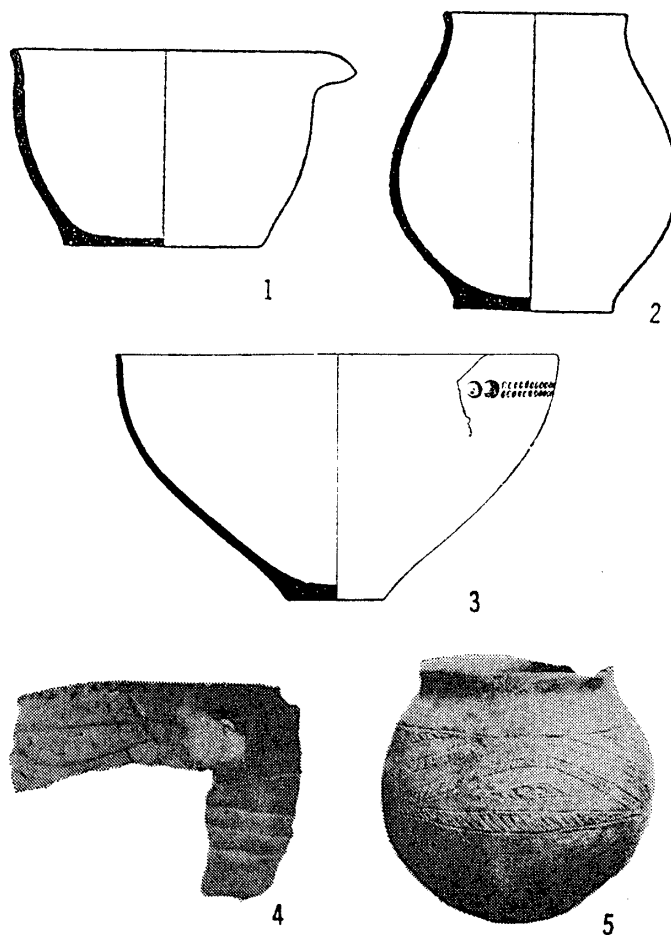


図15 1号(1, 2), 3号(3), 4号(4, 5)墓の土器(3は1/8。他は1/4)

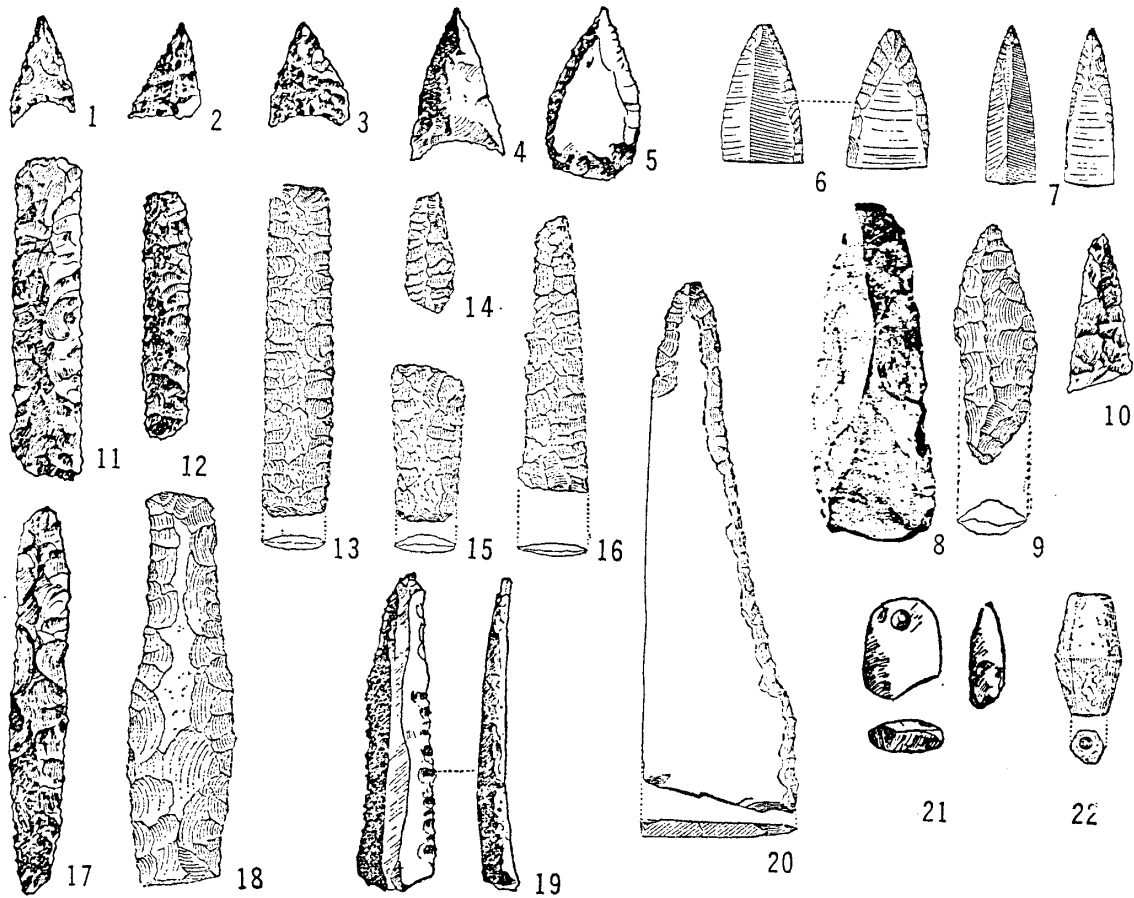


図16 1号墓出土の石器 (2/3)

と石器が伴出しているが、土器の位置付けが難しい。その点で、土器と石器が明らかな基準資料として額拉蘇C遺跡の価値は失われていない。以下、額拉蘇Cの分析を通して昂々溪周辺の編年を考えてみたい。

(a) 額拉蘇C遺跡出土の土器

額拉蘇Cの土器は隆線文からなる極めて単純なものである。これに関して問題がある。同遺跡での奥田(1944)の調査では隆線文土器の他に、他の文様をもつ土器も出ている。奥田の報文で施文原体不明とした「一種の縄蓆紋の如きもの」を、佐藤(1983)、林(Hayashi 1968)は網目文土器とみなしている。加藤(1963)、佐藤は隆線文土器と時期的に分離されると考えている。額拉蘇Cの駒井・水野調査地点での一括単純性を重視しておきたい。東北アジアの丸・尖底土器を代表する網目文土器の分布を考える時、大興安嶺以東にも分布するかは重要な問題であろう(表8)。

報文(奥田 1944)で「外表面に縄蓆紋様のもの乃至は凸小粒子の配列を有する粗質土器はホロンバイルでは海拉爾附近細石器遺跡に類似のものを見、内蒙古でも似寄りの土器片が細石器と共に散布して居らしい。但し此手のものには原体や施紋技法に関する分析がより正確な対比のためにも望ましい。」と述べているが、ここで対比されているものは佐藤達夫の網目文土器の分析(佐藤 1983: p. 25)にみられるごとく、網目文土器であり、その対比が正しいかぎり、網目文土器とい

うことになる。

しかし、従来知られる東北アジアの網目文土器はすべて尖底ないし丸底であるが、昂々溪周辺でそのような器形は知られていない。あるいは平底の網目文土器があるのであろうか。図15—1の1号墓の土器は疑似織布文（具体的にどのような施文をさすのか不明）が施され、加藤（1963）は同種かと考えている。こちらの方が蓋然性が高いように思われる。原体や施文技法に関する分析が今後望まれる。

隆線文土器を考える場合、もう一つ、4号墓（図15—4、5）の問題がある。この2点の土器を副葬品として共伴とみる者（佐藤 1983）と、1点のみを副葬品とみる者（加藤 1963）がいる。これについては1号墓（図15—1、2）が参考になろう。施文原体不明の2点の土器が、広口壺と片口付土器で、4号墓の器種組成とよく似るのは偶然とは思われない。但し、2点の土器を共に副葬品としてみる佐藤は広口壺の年代から隆線文土器をかなり新しく位置づけ、額拉蘇C遺跡の石器は混在とみなしたが、それには無理があろう。広口壺が古くなるのか、隆線文土器に時間的幅があるのか、あるいは混在なのか、今後の調査に期待したい。何れにしろ、加藤（1963）、林（Hayashi 1968）は額拉蘇C遺跡とこれらの墓の石器組成の相異に着目して前者を古く考えた。

(b) 隆線文土器群について

加藤晋平（1982）の指摘のように、シベリアの尖底・丸底土器に対峙するように極東の新石器時代には平底土器が広く分布している。そのなかで、内陸のアムール川（黒龍江）中流域、松嫩平原では隆線文土器が特徴的に分布しており、地域色を形成している。その隆線文土器も土器自体や石器からみて細別が可能であろう。齊々哈爾周辺では額拉蘇C遺跡のものと、今回報告の五福Aのものは区別される。他にも、額拉蘇C遺跡のものと異なる文様が従来から報告されている（Лукашкин 1934 他）が断片的でよく分かっていない。

しかし、宮本（1985）が双塔屯遺跡（吉林省文物工作隊 1983）で出ている唯一片の連続弧線文を共伴として昂々溪と新楽下層を対比されたのは重要であろう。双塔屯は同じく貝殻混りの左家山類型（吉林大学歴史系考古専業 1985）を介すると更に新楽下層との関連が強い。類例の増加を待ちたいが、後述するC14年代はこれを裏付けようか。各々の時間幅も考慮しなければならないが、大よそこれを基点として周辺地域の土器を見る視座が獲得されることになるのである。

アムール川中流域ではまとまった資料としてノヴォペトロフカ文化（図17—1、2）、オシノヴォエ湖文化（図17—3～6）のものがある。石刃鏃を伴うノヴォペトロフカが古く、両面加工の石

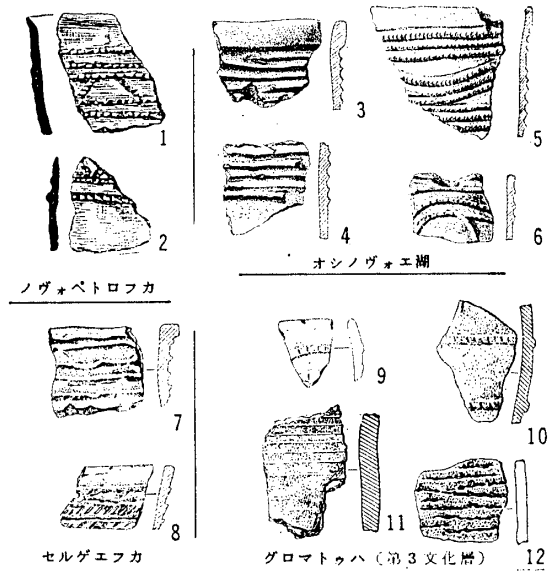


図17 アムール川中流域の隆線文土器

鍬を伴うオンヴォエ湖が新しい。額拉蘇Cは石器組成からノヴォペトロフカ文化に類似し、オンヴォエ湖の平行隆線間の隆線が蛇行する文様は4号墓の注口土器（図15—4）に類似する。隆線文土器群の新しい段階の特徴であろうか。石刃鍬を伴うセルゲエフカ遺跡はグロマトゥハ文化の新しい段階に比定されており（Окладников, Деревянко 1977），一般的にノヴォペトロフカ文化はグロマトゥハ文化に先行すると考えられている。ところが，両文化の関係，グロマトゥハ文化内でのセルゲエフカ遺跡の位置付けはそれほど単純ではない。

土器はどうであろうか。セルゲエフカに顕著な隆線文土器はグロマトゥハにも少量あるが，似ていない（図17—9～12）。しかし，セルゲエフカ遺跡の遺物は表採資料に近いものが多いらしく，一方鉄器時代の隆線文土器の特徴を持つものがあるという。石刃鍬の存在から，他の遺跡での隆線文土器との共伴を想起すると，図示された隆線文土器のすべてが鉄器時代に下るとは思えず，石刃鍬と関連する隆線文土器を考えたいが，報告に言及されていない以上慎重を期す必要がある。中村嘉男（1982）はグロマトゥハ遺跡のものが微隆線であり，日本の隆線文土器の変遷に基づき，ノヴォペトロフカと同様に，逆にセルゲエフカ遺跡を古くする。しかし，グロマトゥハの隆線にも各種あり，一概には言えない。

オクラドニコフ，ジェレビアンコ（Окладников, Деревянко 1977）はグロマトゥハ文化とノヴォペトロフカ文化をそれぞれ祖形とする文化を異にする異系統の文化と理解して，この近接するにもかかわらず全く異なる現象を理解しようとしている。グロマトゥハはアムール川下流のオンボ

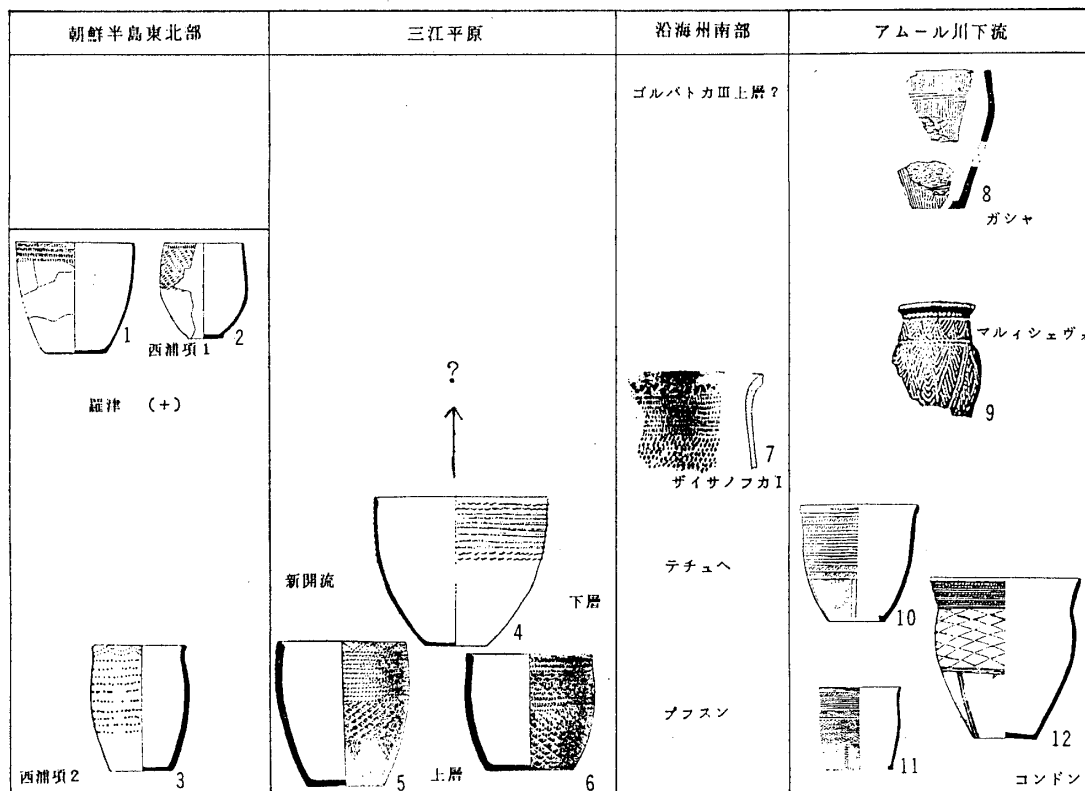


図18 極東沿岸部の新石器時代（前半）土器の変遷  
（小川 1985 一部改）

### 昂々溪採集の遺物について

フカに淵源をもち、ノヴォペトロフカはウスチノフカに淵源をもつとされる。

しかし、グロマトゥハ近似の石器は更に西にザバイカルまで分布していることが指摘され、単に別系統として理解するだけではすまずやはり、時間差を考慮しなければならない。石刃の盛衰や土器の量等の観点から、ノヴォペトロフカ文化の先行、同時並存としているが、オシポフカ文化からグロマトゥハ文化へ石刃製石器が増加するという点、ノヴォペトロフカ文化にある磨製石器が両者に不明なことも含め、簡単にノヴォペトロフカ→グロマトゥハとするには石器の理解が難しい。

一方、新開流遺跡の隆線文土器は完形土器を含む下層と共に上層にもあり、アムール編目文土器も上、下層にある。隆線文土器とアムール編目文土器はそれぞれが単独で出土する遺跡と、共に出土する遺跡がある。これをどう解釈するか難しい。両者を地域差、別系統と考え、共存とする立場と、時期差と考え混在とする立場がありうる。隆線文土器を出す遺跡には、額拉蘇C、ノヴォペトロフカ、オシノヴォエ湖等がある。アムール編目文土器を出す遺跡には詳細が不明なものが多く、よく分からないが、隆線文土器を出す遺跡には、新開流、青肯泡（趙 1962）、コンドン、セルゲエフカ（？）等がある。出てない遺跡としては、テチュヘ、西浦項（金、徐 1972）、万里霍通（郝 1984）がある。

隆線文土器群に時間幅がありアムール編目文土器との対比が難しいが、今の所隆線文土器は内陸部に主に分布しアムール編目文土器はアムール川下流を含む極東沿岸部に分布の中心があるようだ。この段階の沿岸部にもやはり地域差があり、注目すべき編年を示されたブロジャンスキー（Бродянский 1979）による「櫛目文文化」、「押捺文文化」の二系統区分があるようにコンドンの土器と西浦項2期の土器を両極として見ると理解しやすい。

アムール編目文土器を出す遺跡の中では隆線文土器が伴うコンドンは土器の文様の類似から共件と考えられよう。コンドンの両者の土器に共通する文様として胴部下半に垂下するモチーフがある（図18—10～12）。この独特のモチーフが無関係とは考えられない。アムール編目文を特徴とするコンドン期の前後にはマルィシェヴォ期<sup>2)</sup>、コンドン3号円形竪穴の土器に代表されるヴォズネセノフカ期があり断絶も認められないから前後関係として捉えるのも無理がある。新開流は隆線文土器とアムール編目文などの押捺文の系統が共存する状況として理解し、それぞれ下層、上層に推移があるのであろうか。アムール編目文などの押捺文では下層から上層に文様が複雑になるようで、下層、上層に分けられる。一方、隆線文土器は下層、上層にどのような推移があるか明らかではない。

報告では下、上層に大きな区別がないとされているが、下層については隆線文の完形土器以外に詳しいことが分からず、霍通で隆線文が報じられていないことが問題を複雑にしている。筆者は従前下層の隆線文土器は同層の押捺文系統の土器に伴い、近隣の西浦項貝塚の1期から2期に、ザイサノフカIからテチュヘ、プフスンへの連続性から考えてその段階に位置付けられると考えたことがある。（小川 1985）。しかし、先に新楽下層との対比を示された宮本（1985）編年を参考にしながら見るに、松嫩、三江平原で確実に先行する土器が明らかでない以上この隆線文土器の上限が確定できなくなる<sup>3)</sup>。従って以前発表した極東沿岸部の新石器時代の土器の位置付けには問題があり、

表9 昂々溪の二つの石器群（黒龍江省博物館 1974より作成）

	石 材	石 鏃・削 器	石槍	石 錐 等（尖状器）
莫 古 気 A	碧 玉 主	一 部 大 型	多	石 刃 製 主
額 拉 蘇 A	石 髓 主	小 型 多 し	少	剝 片 製 主

不明なアムール中流は撤回し図18のようになるが新開流の隆線文土器の上限が確定されないことになりその位置は保留としておきたい<sup>4)</sup>。

では、内陸部の隆線文土器はどのように位置付けられようか。額拉蘇Cとノヴォペトロフカは土器は似ていないが同じ隆線文土器であり、石器組成は類似している。上述のことから、漠然とした新楽下層との対比の他に通説に従えばグロマトゥハに並行ないし先行し、マルィシェヴォ期との関係も同様になるが、内陸部自体の複雑な状況の解明がまずこれからの課題であろう。

#### (ii) 石器について

額拉蘇C遺跡の石器として、石刃鏃があることは広く知られるところである。数量的にみて、これらが組成の全てを含むとも思えないが、全体を見てすぐ気付くのは石刃および石刃製の石器が卓越していることであろう。

#### (a) 昂々溪新石器時代の若干の石器群

昂々溪新石器時代の石器群がいくつか細別されうるといふ考えは過去数人の研究者が指摘している。加藤晋平（1963）、林謙作（Hayashi 1968）は墓（人骨）に伴う石器群と額拉蘇Cの石器群を分離した。前者には両面加工の植刃、無茎石鏃（図16）が伴い前者が遅れるとした。

中国では、趙善桐、楊虎（黒龍江省博物館 1974）が、戦後の調査の成果に基づき、二つの石器群があることを指摘した。敢えて、示すならば表9の様になろう。

既に触れたごとく、莫古気Aがより古い様相を示していよう。これらと額拉蘇C遺跡との関係はどうなるのであろうか。両者とも明確な石刃鏃が報じられていないが、敢えて言えば、莫古気Aがより近いことになろう。1号墓（人骨）に伴う遺物は石髓製が多く後者に関連するのであろう。前述の如く二者がそれぞれ単一時期の遺跡か不明である。額拉蘇に後続すると見られる1号墓に伴う石器（図16）中には両面加工の無茎石鏃の他に石刃鏃が含まれているが、混在とすべきであろうか。齊々哈爾周辺における石鏃としては、石刃鏃が古く両面加工の石鏃が新しい様相であることは間違いないが、その変遷は明らかとなっていない。図14—1, 3, 4のKG—5資料のごとく、共に採集されるのが昂々溪や近隣地域での一般的な在り方らしいが、額拉蘇Cの駒井、水野採集地点が更に単純な姿を示しているのであろうか。ノヴォペトロフカ文化の組成は額拉蘇Cと近似し、剝片素材の両面加工石鏃の伴わない段階を支持しているように見える。後続する段階に両者が共存することもありうる。図16—19の石器も石刃素材とみられるから、一概に混在として無視するわけにはいかないが伴出に疑問が残る。

(b) 石刃鏃

基部の形態には尖基，円基，凹基，直基？がある。幅は10mm前後に集中する。東北アジアの石刃鏃の類例を概観すると，長さにはばらつきがあるが幅は10mm前後に集中する。これは単に素材としての石刃の幅に制約されているのではなく，意図的な選択が働いているのが，トコロ貝塚（駒井和愛編 1963）で指摘されており，ノヴォペトロフカ文化でも図示された資料の中，ノヴォペトロフカⅡ—1～8号堅穴の資料に従ってみると，石刃全体では幅は平均で約14mmで分散が約15になるが，石刃鏃のみでは約10mmとなり，分散は約4となる。ただし，数値は報告からの計測であり，また，図示されているものが全体を代表しうるかの危険があること，器種の認定に問題があることなど問題があるが，上の数値は大よその傾向をしめしていよう（表12～15）。

石刃鏃はアムール川下流ではマルィシェヴォ期とコンドン期に伴う。コンドン遺跡やプフスン遺跡をみると，コンドン期並行期には有茎のコンドン型（オクラドニコフ 1965）が目立つ。新開流遺跡の有茎石刃鏃もこれに関連しよう。マルィシェヴォ期には柳葉形のものに伴うらしいが，詳細は不明（Окладников，Деревянко 1973）。アムール川中流では，ノヴォペトロフカ文化が石刃鏃を伴う文化として著名である。セルゲエフカ遺跡ではグロマトゥハ文化に属する下層から石刃鏃が両面加工の楕円形小型尖頭器（石鏃？）と共に出ている。グロマトゥハ文化を代表するグロマトゥハ遺跡では両面加工の三角形石鏃も石刃鏃もほとんど出しておらず，先行するオンポフカ（Окладников，Деревянко 1977），ヤガシャ（Окладников，Медведев 1983）に類似する，両面加工の楕円形小型尖頭器（石鏃？）が特徴的である。セルゲエフカ遺跡下層よりグロマトゥハ遺跡を先行させているのは興味深い。遼河流域では新楽，富河溝門が著名であり，前者が古い。

アムール川上流では，シルカ洞穴が知られている（Окладников 1960）。斜基の石刃鏃が特徴的である。時期細別の問題があって複雑な遺跡であるが，土器は丸底であり，シベリア方面と関連するので同一水系であってもここでは扱わない。

他に，この時期に伴う磨製石鏃，骨鏃が注意されよう。素材が異なるだけで，形態は石刃鏃と同様である。磨製石鏃で断面が長六角形のは，擦切技法によるものとみられる。分布は南に偏り，プフスン（Окладников 1964），ザレチェⅠ，ハンシⅠ（Андреев 1960），新開流，西浦項2期から更に，遼河流域の新楽（瀋陽市文物管理弁公室 1978），富河溝門（中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1964）に至り，磨製石鏃，骨鏃の世界である華北の新石器文化に連なるわけで，その分布が内陸に及ばないこととあわせ，周縁における興味ぶかい現象であろう。

(c) 彫器

額拉蘇Cでは切断した石刃の片，両側縁に刻打を施すのが特徴的である。KG—5資料の一例（図14—7）の類例は以前にも五福Aより知られている（Teihard de Chardin 1932）。東北アジアにおける彫器，特に横断刻面型彫器については加藤晋平により長らく追求されてきたもので，加藤，松本（1984）による詳細な分析がある。上述の彫器もその流れの中で捉えられるべきであろう。昂々溪周辺では額拉蘇Cに先行する段階は殆ど知られていないことと，ノヴォペトロフカにも

斜めに入るものがあるから、あるいはこの時期に伴うのかもしれない。

額拉蘇Cの側方式の類例はノヴォペトロフカに見られるが、刻打の入り方がかなり異なり、全く同一視するわけにはいかない。東北アジアでは側方式彫器は横断刻面型彫器より遅れるものであり、ザバイカルでは土器出現以降も残り、かなり遅れて側方式彫器が現われる(加藤, 松本1984)。

一方、ヤクーチアでは土器出現以前のスゥムナギン文化で既に側方式になっており、ザバイカルとの跛行現象を示しているが、土器出現の年代差だけでは説明できない。これらは丸底・尖底土器分布圏の中だが、平底土器分布圏ではどうであろうか。オシボフカ文化とグロマトゥハ文化<sup>5)</sup>には中央式の彫器があり、その素材が剥片から石刃に変わることが指摘されており(Окладников, Деревянко 1977), グロマトゥハには側方式彫器が認められない一方、横断刻面型彫器がある(加藤, 松本 1984)。極東沿岸地域での土器出現以降の様相は不明瞭のため、グロマトゥハ的な在り方と、ノヴォペトロフカ、額拉蘇的な在り方をどのように捉えるか難しい。梶原(1986)も指摘するごとく、グロマトゥハ遺跡での細石刃核や彫器などの石器と土器の共伴を重視するかぎり、グロマトゥハの年代を一概に新しくするわけにはいかない。

#### (d) 石 刃

各遺跡の石刃を記述した際、額拉蘇Cと五福A他でその左右の遍在性が異なることを指摘したが、それが植刃としての在り方(藤本 1982, 木村 1983)を直接示すかは点数が少ないことと後者の資料に問題があることから疑問があり、両者の差に意味を持たせるのは危険であるが、全て均一ではないことは注意される。

また、今回二次加工と刃こぼれの識別が筆者には判断できないものがあり一括して扱ったが、やはり二次加工と刃こぼれでは意味が異なり、刃こぼれ中には後世のものも含まれるであろうから同列に扱うのは左右性を考えるには問題であろう。

二次加工と使用痕を分別した佐藤達夫(1961)によるホロンバイル採集資料の分析によれば、二次加工で1—4—1, 使用痕で5—5—2, 全体で1—10—1となり、二次加工と使用痕で異なる結果が出ている。

林西採集の資料を詳細に分析した児玉重夫(1943)によれば、打調(二次加工をさすとみられる)は幅広部を上にして(打点部上が多いとされる)、片側のみにあるものが72点で、両側にあるものが54点であるが、残念ながら左右の弁別をしていない。

表10, 11には石刃の大きさ、すなわち長さとの幅の関係を示した。特に、ここで検討するのは長さである。完存品と、頭部片、胴部片、尾部片に分けて表示している。石刃が三分割された場合、胴部片が均一な長さを示すかと予想したが、額拉蘇Cではばらつきが大きく、頭部片のばらつきとはほぼ等しく、両者が等価であることを示唆する。桑月, 佐川(1983)は実際にはめ込まれた植刃の例から、植刃の長さにはばらつきがあり長さより幅が重要であることを指摘している。これに対し、五福A他の石刃では胴部片は長さが比較的纏まり、頭部片のばらつきより小さい。前出の左右性同様、額拉蘇Cと異なる結果を示すが、やはり資料的な問題からこれ以上の言及は避けたい。



昂々溪採集の遺物について

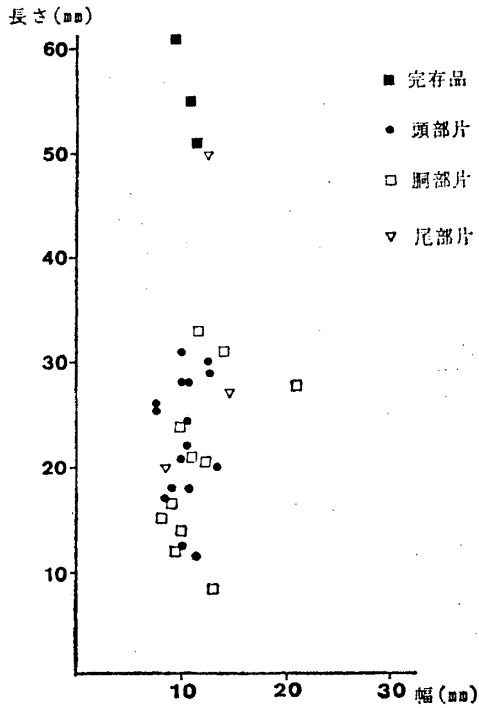


表10 額拉蘇Cの石刃の大きさ

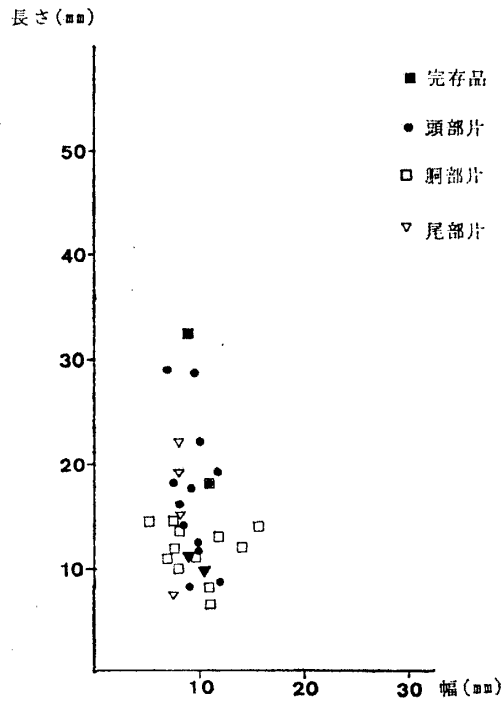


表11 五福A他の石刃の大きさ

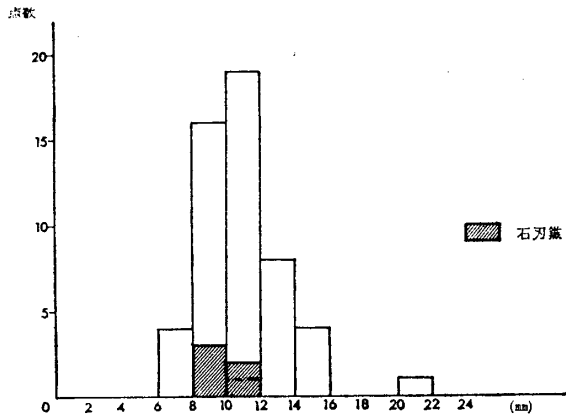


表12 額拉蘇C出土の石刃の幅

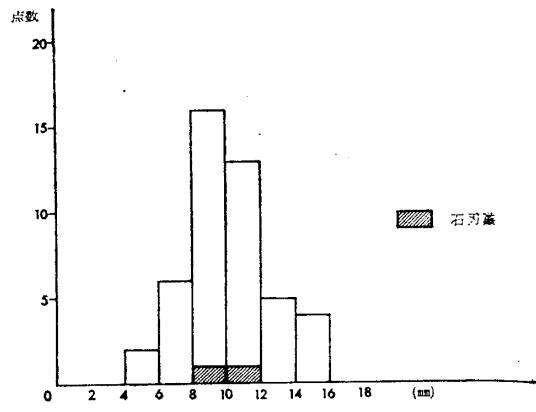


表13 五福A他採集の石刃の幅

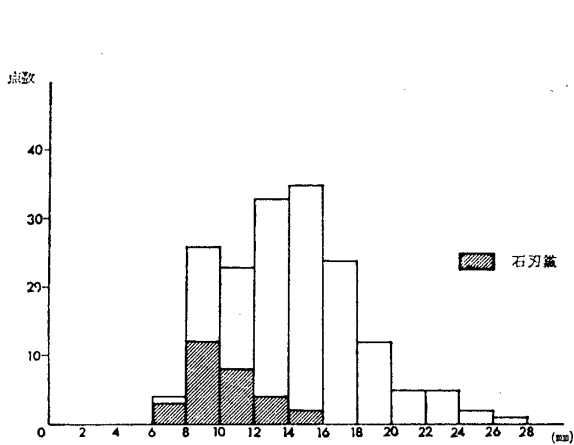


表14 ノヴォペトロフカII-1~8号竖穴出土の石刃の幅

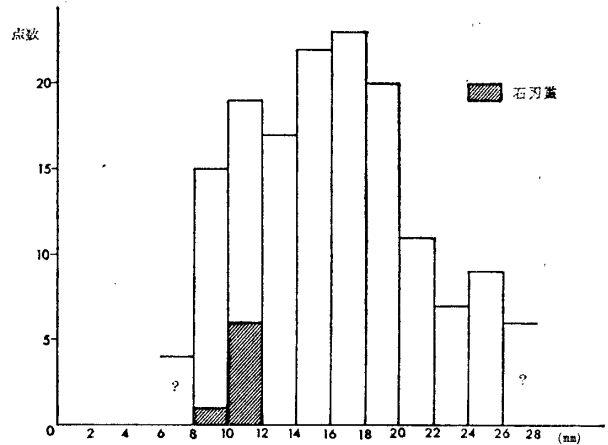


表15 トコロ貝塚FトレンチB 4, 5, C 4, 5区出土の石刃の幅

額拉蘇Cの石刃の製作技術的側面については、石核が出ていないこともあり、多くを語れない。円錐ないし円筒形の石刃核から作出されているようであり(Ларичев 1960)、図13—1もこの時期のものであろうか。

石刃の幅の度数分布を各遺跡毎に表12~15に示した。計測値は0.5mm刻みである。表14は報文の図より計測したものであり、かなりの誤差を含むであろう。表15の北海道トコロ貝塚の左右の「？」は8mm未満4点、26mm以上6点であることを示す。額拉蘇Cの平均は約10.6mmで、五福A他の平均は約9.7mmで近似する。両者共1モードで分散が小さい。一方、ノヴォペトロフカII—1~8号堅穴は平均13.9mmで、トコロ貝塚は最大値が16~18mm区間にあり、両者共大略1モードで分散が大きい。ノヴォペトロフカについては、報文としての性格上、最も数の多い二次加工のない石刃が最も図示されていないという点から、本来の分布とは多少異なっているであろうし、額拉蘇C、五福A他は点数が少なく、同様の危険性がある。しかし、後二者の方が幅が広く、バラツキが大きい点は動かないであろう。周辺地域でのクサビ形細石刃核に伴う細石刃について見ると、今回未報告の海拉爾の資料では平均約7mm、分散約2.4で、細く均一である。

この様な石刃の幅の相異については様々な解釈が可能であろうが、更に広範囲な資料を比較することが望ましい。一つの傾向として、幅が広くなるほどバラツキが大きくなることが言える。その中で、石器の素材の人為的選択が行われている。また、トコロ貝塚は額拉蘇よりもノヴォペトロフカにより近いことが言える。

前出のホロンバイル例では石刃鏃を含み、「やや時期的に纏まりあるもの」(佐藤 1961)で、石刃の幅の平均は9.4mmであり、今回報告例に近い。また、前出の林西例は平均7mmで海拉爾例に近い。この林西例は一括資料ではなく、必ずしも単一時期のものだけとは限らないが、その幅の度数分布を見るかぎり、かなり纏まりある資料のごとく見られる。伴う石核の記載もないが、林西例は海拉爾と共に石刃鏃を伴う段階に先行するものと考えられるかもしれない。時期による幅の相違は、今後確認すべき課題である。

石刃と細石刃の境界については議論の分かれる所であり(藤本 1982)、額拉蘇Cの石刃も細石刃とする基準もありうるが、ノヴォペトロフカ、額拉蘇C、海拉爾の三者を見るとき、額拉蘇Cと海拉爾の間が石器群として距離があり、数字で示せば平均約10mmと平均約7mmの間で分けた方が、本地域に限っては考えやすい。従って、この報文では石刃として分類している。

### (iii) 極東の新石器時代

東北アジア全域にわたる土器出現前後の石刃技法の推移については、桑月、佐川(1983)が詳細に分析しているのでそちらに譲るが、その後資料も増加しており、若干補足しておく。表16、17はヤクーチアにおける石刃石器あるいは石刃の盛衰を二つの代表的遺跡(Мочанов 1969, 1977)の数値から作表したものである。石刃石器の全石器に占める割合がスゥムナギン文化でピークに達し、以降新石器時代に減少してゆく。ノヴォペトロフカ文化は80%を数え(木村 1976)、この推移の中で極東最古の土器とされた(Окладников 1970)のも無理からぬ所であろう。

昂々溪採集の遺物について

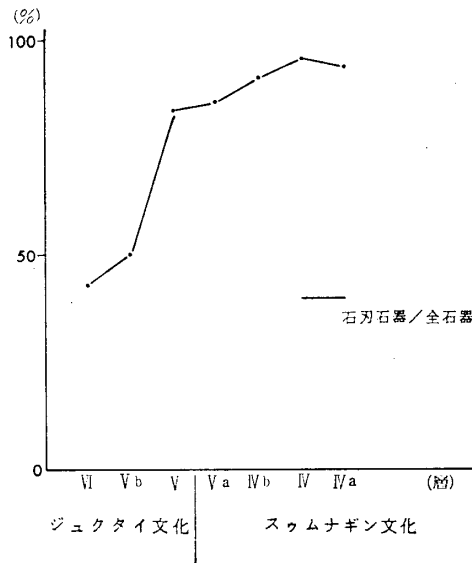


表16 ウスチ・チンプトン遺跡の石刃石器の割合の層位的変化

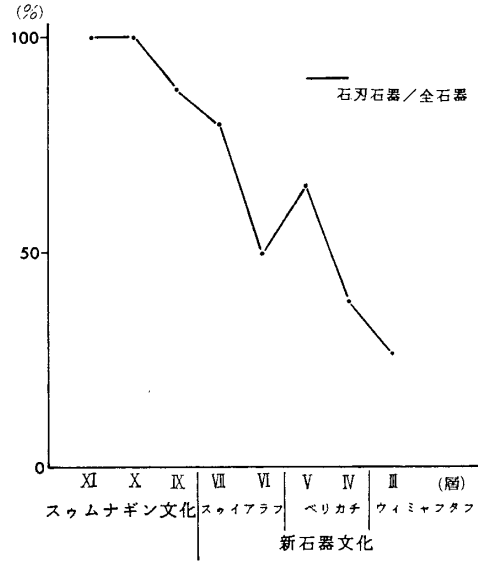


表17 ベリチカ遺跡の石刃石器の割合の層位的変化

さて、ヤクーチアにおける石刃石器あるいは石刃の盛衰がそのまま東北アジア全域に適用することはできず、おそらく地域差があったと予想される（桑月、佐川 1983）。漸く地域差を問題にするだけの資料および研究が蓄積されてきている。

梶原（1986）も指摘するごとく、最近アムール川中流のガシャでは従来中石器文化とされていたオンポフカ文化の石器に伴って土器が発見され、また従来オクラドニコフ（Okladnikov 1965）により指摘され、佐藤達夫（Sato 1971）が注目していた“smooth surfaced pottery”と目される、胎土に有機物を混入する平底の無文土器が沿海州南部のゴルバトカⅢを始めとするいくつかの遺跡で出ていることが報じられている（Бродянский 1979, Кузнецов 1983, 1986）。更に、最近のスヴォロヴォ遺跡（Васильевский 1985）では土器出現前後の段階が整理され、ウスチノフカー スヴォロヴォ→ゴルバトカⅢ上層の変遷が示され、漸く極東各地における土器出現前後の様相を具体的に検討できるようになりつつある。この様な中で、両面加工の尖頭器がこの前後に発達することが判明し、一方、土器出現以降の細石刃核の存在を積極的に評価する見直しも必要であろう（梶原 1986）。

極東沿岸部の土器出現前後の段階にはアムール川下流と沿海州南部では今の所、大分石器組成に差がありそうだが共通して尖頭器とクサビ形細石刃核が伴い、日本の長者久保・神子柴石器群そのものを大陸に求めるのは難しい。小南山の石器（黒龍江省博物館 1972）もすべて完形の土器に伴う新しいものかどうか、他の土器小片に伴うか不明だが、この様な流れの中で捉えられないであろうか、類例を待ちたい。また、オンポフカからグロマトゥハへ石刃が増加する（Okladnikov, Деревянко 1977）ことをどう理解するか興味深い課題である。

石刃石器の衰退あるいは消滅もやはり各地域で異なるのであろう。アムール川中流ではオンノヴ

オニ湖，セルゲエフカ上層では既に無い。アムール川下流を含む極東沿岸地域ではヴォズネセノフカ期あるいはそれに並行する段階で失くなるらしい。ただし，朝鮮半島東北部の西浦項貝塚では古い1，2期でも石刃石器についてはよくわからない。地域差であろうか。

内陸部でも一般的には，新石器時代の古い段階では石刃石器が発達し，以後衰退する過程として捉えられる。石刃石器が著しく発達したノヴォペトロフカや額拉蘇Cが古い。額拉蘇Cの隆線文土器は新開流の土器に類似する（黒龍江省考古文物工作隊 1979，桑月，佐川 1983）が，石器組成が異なる。ヤクーチアの石刃石器の変遷を考慮にするならば，一概に時期差と見なせない。しかし，額拉蘇Cの隆線文土器は石器上の対比とは異なり，ノヴォペトロフカよりセルゲエフカ，オシノヴォニ湖に近い（図17）。石器組成からもノヴォペトロフカが若干古い様相を呈しており，ある程度の時間幅を見ておかなければならない<sup>9)</sup>。

一方，グロマトゥハの土器も複雑な様相を示し，その位置付けには不明の点が多いが，アムール川下流域との対比を足掛かりにして考えれば，第1文化層はアムール編目文土器や渦巻文があることから，コンドン，ヴォズネセノフカ期に比定できる資料を含むが，第2，3文化層が典型的なグロマトゥハ文化の段階であるから，第1文化層は除外しておく。第2，3文化層にはマルィシェヴォ，ザイサノフカに対比できる（中村 1982）土器が含まれる。ガシャの出現により，オシポフカ，グロマトゥハの連続性を考えると，更に古い土器を含んでいるのかもしれない。このグロマトゥハ，マルィシェヴォ期とノヴォペトロフカとの同時並存を含めた関係については，通説に従うべき点が多いであろうが，「最古の土器」群である，ガシャ，ゴルバトカⅢ上層との間には相当の間隙がある。一方，北のヤクーチアではそれらと対峙して土器のないスゥムナギン文化が厳然としてあり，南の華北では農耕文化に伴う土器がかなり古くなりそうな気配であると同時に，石刃石器の消長の南北での落差も注意しなければならない。

#### (iv) 生 業

新開流での魚の貯蔵穴やノヴォペトロフカでの石錘の出土等，石刃鏃と関連する時期に漁撈活動が盛んであったことが指摘されている（加藤 1982，山浦 1983）。直良・金子報文に明らかなごとく，多くの魚骨が出ており，額拉蘇Cでも盛んであったことが知られる。五福Aより両端打ち欠きの石錘が出ることが報じられている（Лукашкин 1934）。時期は不詳であるが，4号墓出土の骨器（梁 1932：図20—2）は網の目を揃えるネットゲージ（net gage）と推定され，五福Aの石錘と共に，漁網の発達を明らかにしていようか。さらに，沼沢地に棲む水禽その他の動物を捕えていたことが直良・金子報文に明らかにされている。

## 5. ま と め

額拉蘇C遺跡の資料を中心とした資料報告から始まって，石刃石器を中心として東北アジアにおける土器出現前後の段階からの様々の問題点を未整理のまま指摘しながら論を進めてきたが不明の

## 昂々溪採集の遺物について

点ばかりが目につく。最近各地における新たな資料の発見と報告により大きく前進してきた観があるが、一方、扱う地域が広大なだけに空白の部分が空間的にも時間的にも大きい。後半の拙論とは別に、従来名前のみが先行していた額拉蘇C（オロス）遺跡の資料を報告することでその空白の一部でも埋められれば幸いである。

（付） 貝殻の一部を用いて、東京大学の年代測定室に依頼し、C14年代を測定していただいた。結果はB. P. 6510±90（TK-511, 半減期は5570年）である。関連するC14年代（中国社会科学院考古研究所編 1983）には新楽のB. P. 5970±95, 5975±120, 6155±95, 6430±150, 新開流上層のB. P. 5270±90があり、その中では古い数値であるが新楽下層に近い<sup>7)</sup>。

本報告を作成するにあたり、東京大学の上野佳也教授の御配慮を賜った。石器の実測図作成は田村隆氏の御助力に負う。石材の鑑定については東京大学総合資料館の清水正明氏を煩わせた。写真の殆どは鈴木昭夫氏による。その他、藤本強、宇田川洋、寺島孝一、菊池徹夫、木村英明、大塚達朗、宮本一夫、武藤康弘の諸先生、諸氏の御指導、御助力があった。以上の方々の御協力なしには成稿には至らなかったであろう。

最後に、この場を借りて、中国留学中に御世話になった北京大学の嚴文明先生、吉林大学の張忠培先生、中国社会科学院考古研究所の安志敏先生、中国科学院古脊椎動物与古人類研究所の蓋培先生に謝意を表します。また、昂々溪周辺の踏査の際、御世話になった齊々哈爾市文物管理站の傅維光氏の他多くの方々に感謝します。

## 註

- 1) 遺跡名の表記が駒井・水野 1977と異なるが、遺物袋に付いていたラベルの注記に従う。
- 2) アムール編目文風の格子目状隆線文があるらしく（Окладников, Деревянко 1977）、隆線文やアムール編目文との関連が注意される。
- 3) 宮本一夫氏から有益な御教示をえた。
- 4) 木村英明、宮本一夫両氏の御教示によるところが大きい。
- 5) グロマトッハ文化はヤクーチアとの関連もあり、丸底の存在も否定できない。
- 6) 木村英明氏の御教示をえた。
- 7) マルィシェヴォ、コンドン期のC14年代、5145±65, 4520±20（桑月、佐川 1983）は中国側の数値に比べ新しい傾向を示していて検討を要す。

## 参 考 文 献

### 〔邦 文〕

- 小川（大貫）静夫 1985 「極東新石器時代土器の編年」『東アジアと日本』日本考古学協会研究発表参考図録
- 奥田直栄 1944 「北満昂々溪発見の細石器包含層」『人類学雑誌』59-2
- オクラドニコフ A. P. 1965 「シベリアの旧・中石器時代」『日本の考古学』I
- 小野 昭 1972 「内モンゴリアの細石器」『考古学研究』12-2
- 加藤晋平 1963 「石刃鏃について」『物質文化』1

大貫 静 夫

- 1969 「極東における土器の起源」『歴史教育』1969—4  
1977 「北方農耕覚え書」3 『どるめん』13  
1978 a 「北方農耕覚え書」4 『どるめん』17  
1978 b 「北方農耕覚え書」5 『どるめん』18  
1980 「東アジアにおける狩漁撈社会の発達」『東アジア世界における日本古代史講座』1  
1982 「隣接地域における新石器時代の土器」『縄文土器大成』5  
1984 「極東沿海州のナイフ形石器について」『北方科学調査報告』5  
加藤晋平・松本美枝子 1984 「日本細石刃文化の源流」『史艸』25  
鎌木義昌 1966 「縄文式土器・縄文文化の起源について」『岡山理科大学紀要』2。『論集 日本文化の起源』1 1971 所収。  
梶原 洋 1986 「シベリアにおける細石刃研究の現況」『考古学ジャーナル』243  
木村英明 1976 「石刃鎌文化について」『江上波夫教授古稀記念論集』考古・美術篇  
1983 「細石器（北海道）」『季刊考古学』4  
桑月 鮮・佐川正敏 1983 「旧石器時代終了後の東北アジアにおける石刃および細石刃を素材とする石器群の変遷—日本の石刃鎌文化の理解のために—」『北海道考古学』19  
児玉重雄 1943 「熱河省の考古学的調査研究の一端」『熱河』保存協会誌第四輯  
駒井和愛 1939 「北満州の石器時代文化に就いて」『人類学・先史学講座』12  
駒井和愛編 1963 「朝日トコロ貝塚」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上  
駒井和愛・江上波夫 1934 「東亜考古学」『世界歴史大系』2  
駒井和愛・水野清一 1977 「齊々哈爾・海拉爾遺跡」『中国都城・渤海研究』  
佐川正敏 1985 「中国の細石刃研究の現状と課題」『考古学ジャーナル』243  
佐藤達夫 1961 「ホロンパイルの石器」『ミュージアム』125  
1983 「東亜細石器文化に関する諸問題」『東アジアの先史文化と日本』  
東京大学文学部考古学研究室 1959 『考古図編』17  
中村嘉男 1981 「縄文文化の源を求めて」『考古学研究』28—1  
1982 「縄文文化の源を求めて（続）」『考古学研究』29—1  
林 謙作 1970 「福井洞穴における細石刃技術とその東北アジア・北アメリカにおける位置づけ（上，下）」  
『考古学研究』16—4, 17—2  
1974 「東北アジアの細石刃技術—福井洞穴の細石核工程との比較を中心として—」『日本考古学・古代史論集』  
藤本 強 1982 「常呂川流域の細石刃」『北海道考古学』18  
宮本一夫 1985 「中国東北地方における先史土器の編年と地域性」『史林』68—2  
水野清一・駒井和愛・三上次男 1938 『北満風土雑記』  
山浦 清 1983 「中国東北地区における回転式銛頭について」『貝塚』31  
任美鏗編（阿部治平，駒井正一訳） 1986 『中国の自然地理』

〔中 文〕

- 郝 思德 1984 「桦川万里霍通原始社会遗址调查」『黑龙江文物丛刊』1984—1  
吉林省文物工作队 1983 「吉林洮安县双塔屯原始文化遗址」『考古』1983—12  
吉林大学历史系考古专业 1985 「吉林省農安德惠考古调查简报」『北方文物』1985—1  
黑龙江省博物馆 1972 「黑龙江饶河小南山遗址试掘简报」『考古』1972—2  
黑龙江省博物馆（趙善桐・楊虎）  
1974 「昂昂溪新石器时代遗址的调查」『考古』1974—2  
黑龙江省文物考古工作队（楊虎・譚英杰）

昂々溪採集の遺物について

- 1979 「密山県新開流遺址」『考古学報』1979—4  
黄慰文, 張鎮洪, 繆振棟, 于海明, 初本君, 高振操  
1984 「黒龍江昂々溪的旧石器」『人類学学報』3—3  
梁 思永 1932 「昂昂溪史前遺址」『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』4—1。『梁思永考古論文集』  
1959 所収。  
裴 文中 1954 「長城以北の細石器文化」『中国石器時代的文化』  
佟 柱臣 1979 「試論中国北方和東北地区含有細石器諸文化問題」『考古学報』1979—4  
瀋陽市文物管理弁公室(曲瑞, 瀋長吉)  
1978 「瀋陽新樂遺址試掘報」『考古学報』1978—4  
趙 善桐 1962 「黒龍江安達県青肯泡遺址調査記」『考古』1962—2  
中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队(徐光冀)  
1964 「内蒙古巴林左旗富河溝門遺址發掘簡報」『考古』1964—1  
中国社会科学院考古研究所編  
1983 『中国考古学中碳十四年代数据集』

〔朝 文〕

- 金用珩, 徐國泰 1972 「西浦項原始遺跡發掘報告」『考古民俗論文集』4

〔英 文〕

Hayashi, Kensaku

- 1968 The Fukui Microblade Technology in Northeast Asia and North America. Arctic anthropology, 5—1.

Loukashkin, A. S.

- 1931 New data on the Neolithic culture of Northern Manchuria. The CHINA JOURNAL, 15—4.

- 1932 New data on Neolithic culture in Northern Manchuria. Bulletin of the Geological Society of China. 11

Okladnikov, A. P.

- 1965 The Soviet Far East in Antiquity, Anthropology of the North: Translations from Russian Sources 6. (Original, in Russian, 1959)

- 1981 Ancient art of the Amur region. Leningrad.

Sato, Tatsuo

- 1971 Comments “The Neolithic Culture of Korea”. The Traditional Culture and Society of the Center for Korean Studies, No. 3, Univ. of Hawaii.

Teilhard de Chardin, P.

- 1932 Some observations on the archaeological material collected by Mr. Lukashkin near Tsitsihar. Bulletin of the Geological Society of China, 11.

〔露 文〕

Андреев, Г. Е.

- 1957 Поселение Зайсановка I в Приморье. СА 1957—2.

- 1960 Некоторые вопросы культур южного Приморья III—I тысячелетий до н. э.. МИА 86.

Бродянский, Д. Л.

- 1979 Проблема периодизации и хронологии неолита Приморья. Древние культуры Сибири

大貫 静 夫

и Тихоокеанского бассейна. Новосибирск.

Васильевский, Р. С.

1985 Стоянка Суворово III и ее место в каменном веке Дальнего Востока. Новосибирск.  
Дервянко, А. П.

1970 Новопетровская культура Среднего Амура. Новосибирск.

Кузнецов, А. М.

1983 К Технике получения Микропластин—вкладышей (Приморье). СА 1983—3.

1986 Новые данные по каменному веку Приморья. Палеолит и неолит. Ленинград.

Ларичев, В. Е.

1960 Неолитические памятники бассейна Верхнего Амура (Ананци, Дунбэй). МИА 86.

Лукашкин, С. А.

1934 Исследования неолитических стоянок близ станции Цицихар. Вестник Маньчжурии, 3,  
Харбин.

Окладников, А. П.

1960 Шилкинская пещера—памятник древней культуры верховьев Амура. МИА 86.

1964 Древнее поселение в бухте Пхсун. Археология и этнография Дальнего Востока, I.

1967 Поселение у с. Вознесенка вблизи устья р. Хунгари, Археологические открытия  
1966 года.

1970 Неолит Сибири и Дальнего Востока. МИА 166.

1983 Древнее поселение Кондон. Новосибирск.

1984 Керамика Древнего поселения Кондон. Новосибирск.

Окладников, А. П., Дервянко, А. П.

1973 Далекое плоское Приморья и Приамурья. Владивосток.

Окладников, А. П., Дервянко, А. П.

1977 Громатхинская культура. Новосибирск.

Окладников, А. П., Васильевский, Р. С., Дервянко, А. П.

1971 Археологические исследования на Осиновом озере. Материалы полевых исследований  
Дальневосточной Археологической экспедиции, Вып. II. Новосибирск.

Окладников, А. П., Медведев, В. Е.

1983 Исследование многослойного поселения Гася на нижнем Амуре. Известия Сибирского  
отделения АН СССР, 1983—1.

Мочанов, Ю. А.

1969 Многослойная стоянка Велькачи I и периодизация каменного века Якутии.  
Москва.

1977 Древнейшие этапы заселения человеком Северо-Восточной Азии. Новосибирск.

〔圖出典〕

図15. 1～3は Лукашкин 1934 より。4, 5は梁 1932 より。

図16. Teilhard de Chardin 1932 および 梁 1932 より。

図17. Дервянко 1970, Окладников・Васильевский・Дервянко 1971, Окладников・Дервянко  
1977 より。

図18. 1～3は金・徐 1972 より, 4～6は黒龍江省文物考古工作队 1979 より, 7は Андреев 1960 よ  
り, 8は Окладников・Медведев 1983 より, 9は Okladnikov 1981 より, 10～12は Окладников  
1984 より。



## On Remains of Neolithic Culture Collected from Angangxi

—mainly from Elasu C (in Japanese “Orosu”) site—

Shizuo ONUKI

Angangxi, located on the Nonni river, southwest of Qiqihaer in Heilongjiang province, is one of the best known and most intensively studied Neolithic sites in the Dongbei territory of China (Fig. 1).

Study of the Neolithic remains near Angangxi began more than fifty years ago by A. S. Lukashkin.

The Japanese archaeologists K. Komai and S. Mizuno visited Angangxi in the summer of 1933, excavated Elasu C and made collections at Efu A and elsewhere (Fig. 2).

The main collections that we now report and discuss were recovered from Elasu C site (Figs. 3-10). Others are from Efu A and from an unknown site (Figs. 11-14).

The decoration of potteries found at Elasu C consists only of Linear applique (Figs. 3-5). Most are tempered with crushed shell.

The lithic industry consists mostly of blades and tools on blades, represented by arrowheads on blades (Figs. 6-11).

The radio carbon date of Elasu C site is B. P.  $6510 \pm 90$  (TK-511).

Despite many earlier works, the chronology of Neolithic age at Angangxi has remained obscure. Until recently, all artifacts of the Neolithic culture were assigned to a single “Angangxi microlithic culture”.

S. Kato (1963) and K. Hayashi (1968) recognized two stages: remains from cultural layer represented by Elasu C belong to the earlier stage and remains from graves represented by grave No. 1 (Figs. 15-16) belong to the later stage.

Zhao and Yao (1974) also recognized two groups: the one is represented by Moguqi A; the other by Elasu A (Tab. 9).

The correlation of these two analyses is not certain, so the sequence of these three stages is not sure.

Elasu C/Moguqi A → Elasu A  
grave

K. Miyamoto (1985) insisted that Rocker pattern pottery relates Linear applique pottery of Angangxi with Xinla lower layer. On the other hand, Linear applique pottery relates Elasu C with Xinkailiu lower layer. Hence, Elasu C is estimated to be older than or at least contemporary with "Amur net ware stage" in the coast, represented by Xinkailiu and Kondon.

Neolithic cultures of the inland of the Far East are very complex and difficult to understand.

From the view point of stone artifacts, Elasu C bears much similarity to Novopetrovka culture, which is distributed in the Middle Amur river basin. The decoration of pottery of Novopetrovka is also Linear applique, but not as uniform.

Other sites in the Middle Amur river, Gromatukha and Osinovie Lake also possess Linear applique pottery. Generally, their seriation is estimated as follows:

Novopetrovka/Gromatukha → Osinovie Lake

However, we need to attach importance to the similarity of Gromatukha culture to Osipovka culture which is the pre-ceramic culture in the Lower Amur river. Recently, at Gasha site, whose lithic complex is similar to Osipovka, pottery was recovered. This pottery is one of the oldest potteries in the Far East, much older than Malyshevo.

Gromatukha culture includes Malyshevo ware, so, it is at least contemporaneous with Malyshevo. Thus, their seriation may be estimated as follows:

Osipovka → (Gasha) → Malyshevo (Lower Amur)  
→ Gromatukha (Middle Amur)

The relationship between Gromatukha and Novopetrovka has remained obscure and need reconsideration.

The contents of this paper are as follows.

1. Introduction
2. Sites near Angangxi
  - (i) Names of the sites
  - (ii) Location of Elasu at Angangxi
  - (iii) Investigations at Angangxi

3. Remains from Angangxi
  - (i) Aspects of Materials
  - (ii) Remains from Elasu C
    - (a) Potsherds and clay artifacts
    - (b) Stone artifacts
  - (iii) Remains from Efu A and an unknown site
4. Discussion
  - (i) Pottery
    - (a) Pottery from Elasu C
    - (b) Linear applique ware
  - (ii) Lithic artifacts
    - (a) Some complexes of Neolithic at Angangxi
    - (b) Arrowhead on blade
    - (c) Graver
    - (d) Blade
  - (iii) Neolithic age in the Far East
  - (iv) Subsistence
5. Conclusion (Appendix. The radio carbon date)

#### Illustrations

- Fig. 1 Locations of Angangxi and related sites.
- Fig. 2 Site map around Angangxi.
- Fig. 3 Potsherds from Elasu C (1)
- Fig. 4 Potsherds from Elasu C (2)
- Fig. 5 Potsherds (3) and clay artifacts from Elasu C
- Fig. 6 Stone artifacts from Elasu C (1)
- Fig. 7 Stone artifacts from Elasu C (2)
- Fig. 8 Stone artifacts from Elasu C (3)
- Fig. 9 Stone artifacts from Elasu C (4)
- Fig. 10 Stone artifacts from Elasu C (5)
- Fig. 11 Potsherds from Efu A
- Fig. 12 Stone artifacts from Efu A
- Fig. 13 Stone artifacts from an unknown site (1)
- Fig. 14 Stone artifacts from an unknown site (2)
- Fig. 15 Pottries from the graves No. 1, 3, 4.
- Fig. 16 Stone artifacts from the grave No. 1.
- Fig. 17 Linear applique potteries in the middle valley of Amur river.
- Fig. 18 The chronology of potteries of neolithic age (early half) in the coast of the Far East.

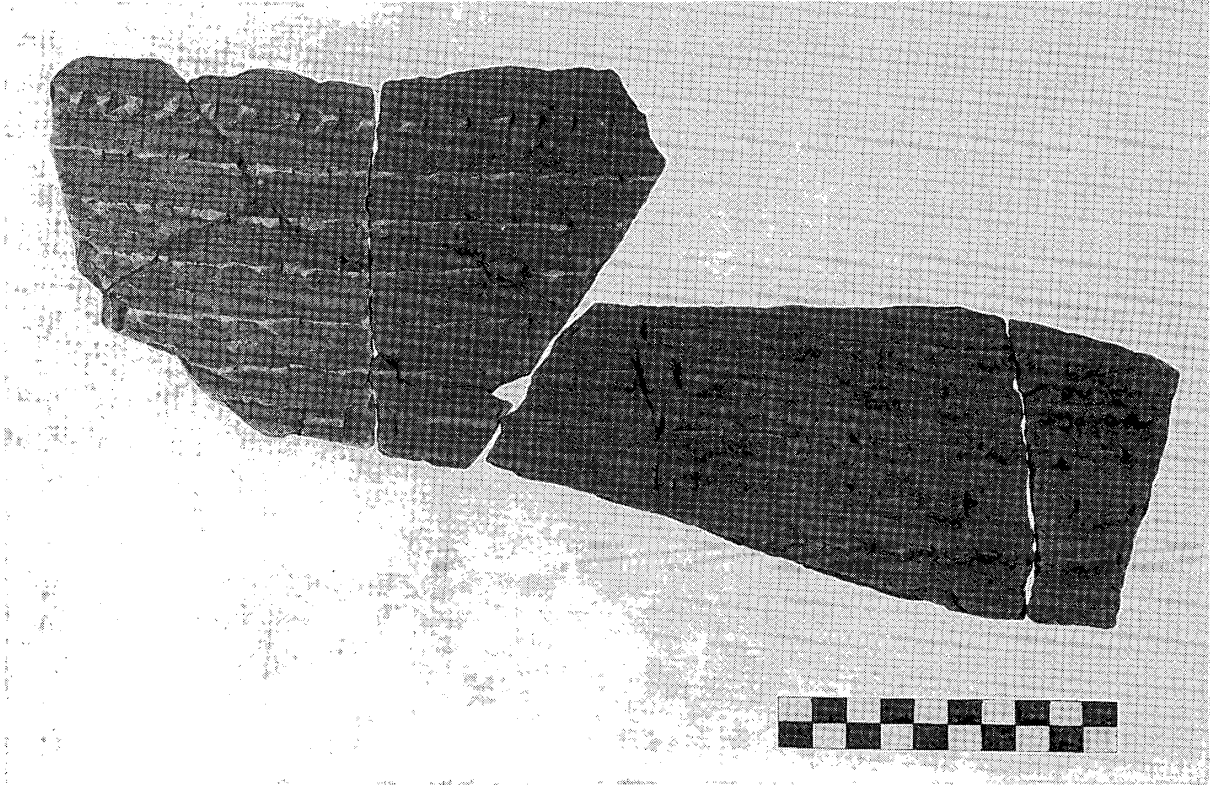
Plates

- P l. 1 Potsherds from Elasu C (1)
- P l. 2 Potsherds from Elasu C (2)
- P l. 3 Potsherds from Elasu C (3)
- P l. 4 Potsherds from Elasu C (4)
- P l. 5 Potsherds from Elasu C (5)
- P l. 6 Stone artifacts from Elasu C (1)
- P l. 7 Stone artifacts from Elasu C (2)
- P l. 8 Stone artifacts from Elasu C (3)
- P l. 9 Stone artifacts from Elasu C (4)
- P l.10 Clay artifacts from Elasu C
- P l.11 Potsherds from Efu A
- P l.12 Stone artifacts from Efu A and an unknown site
- P l.13 Stone artifacts from Efu A and an unknown site

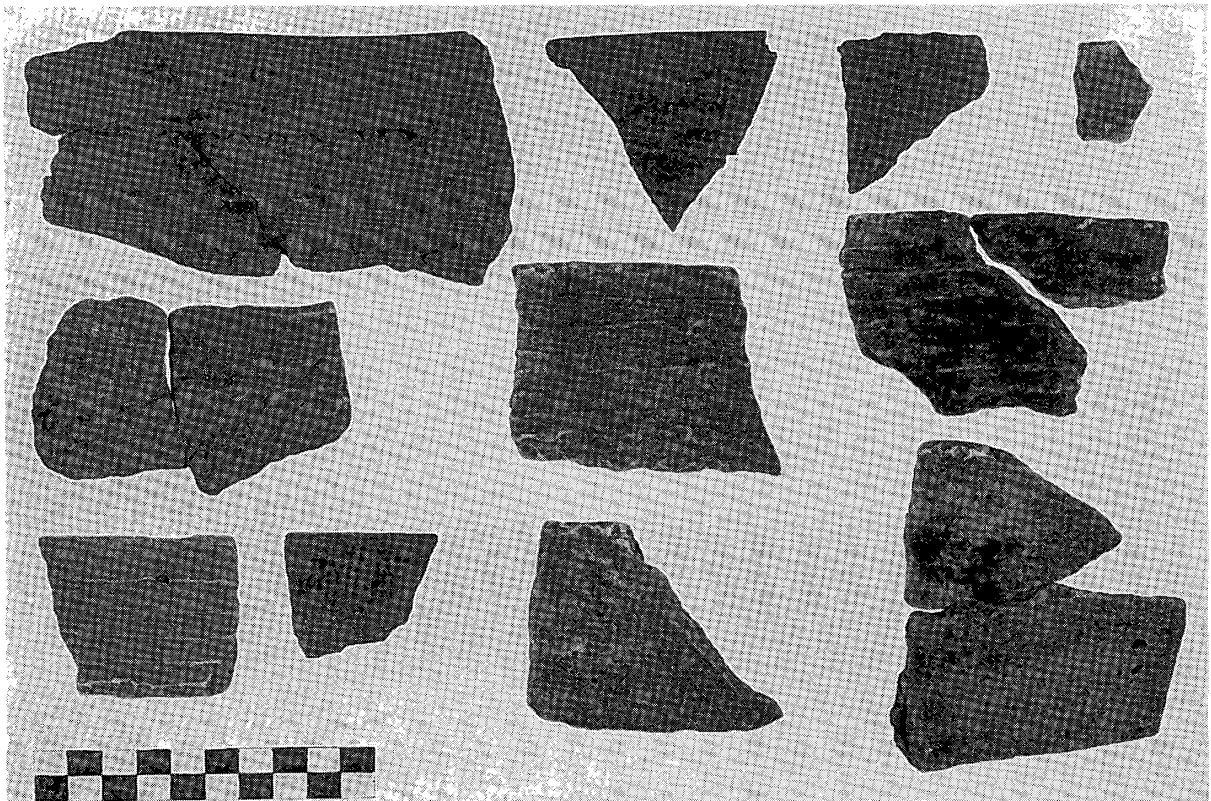
Tables

- Tab. 1 Correlation of sites and localities in every report.
- Tab. 2 Blades and tools on blades from Elasu C (1)
- Tab. 3 Blades and tools on blades from Elasu C (2)
- Tab. 4 The disposition of Right-and-Left of blades from Elasu C.
- Tab. 5 Blades and tools on blades from Efu A and an unknown site (1)
- Tab. 6 Blades and tools on blades from Efu A and an unknown site (2)
- Tab. 7 The disposition of Right-and-Left of Blades from Elasu C.
- Tab. 8 The distribution of net impressed potteries.
- Tab. 9 Two complexes of stone artifacts at Angangxi.
- Tab.10 Sizes of blades from Elasu C.
- Tab.11 Sizes of blades from Efu A and an unknown site
- Tab.12 Width of blades from Elasu C
- Tab.13 Widths of blades from Efu A and an unknown site
- Tab.14 Widths of blades from pitdwellings No. 1~8 of Novopetrovka II.
- Tab.15 Widths of blades from the districts of B 4, 5 of F trench at Tokoro shell mound.
- Tab.16 The stratigraphic change of the percentage of tools on blades at Ust' Timpton.
- Tab.17 The stratigraphic change of the percentage of tools on blades at Bel' kachi.

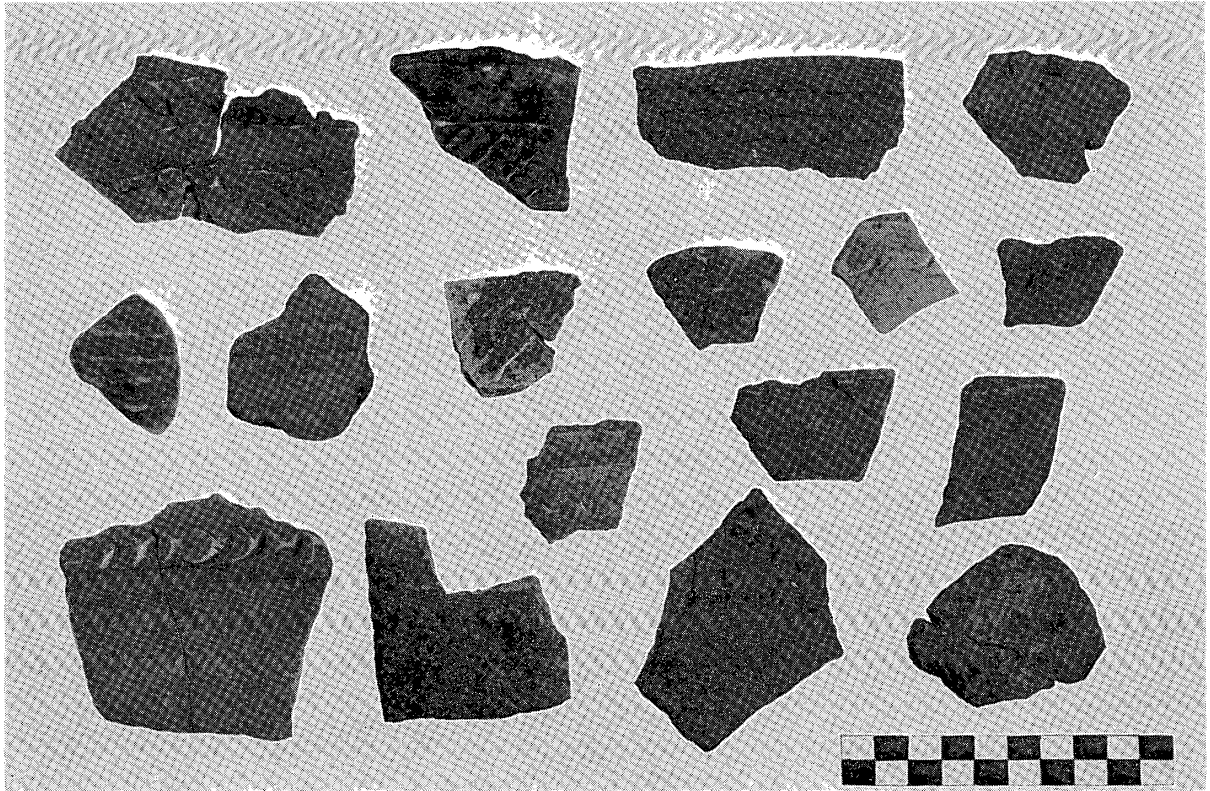
昂々溪採集の遺物について



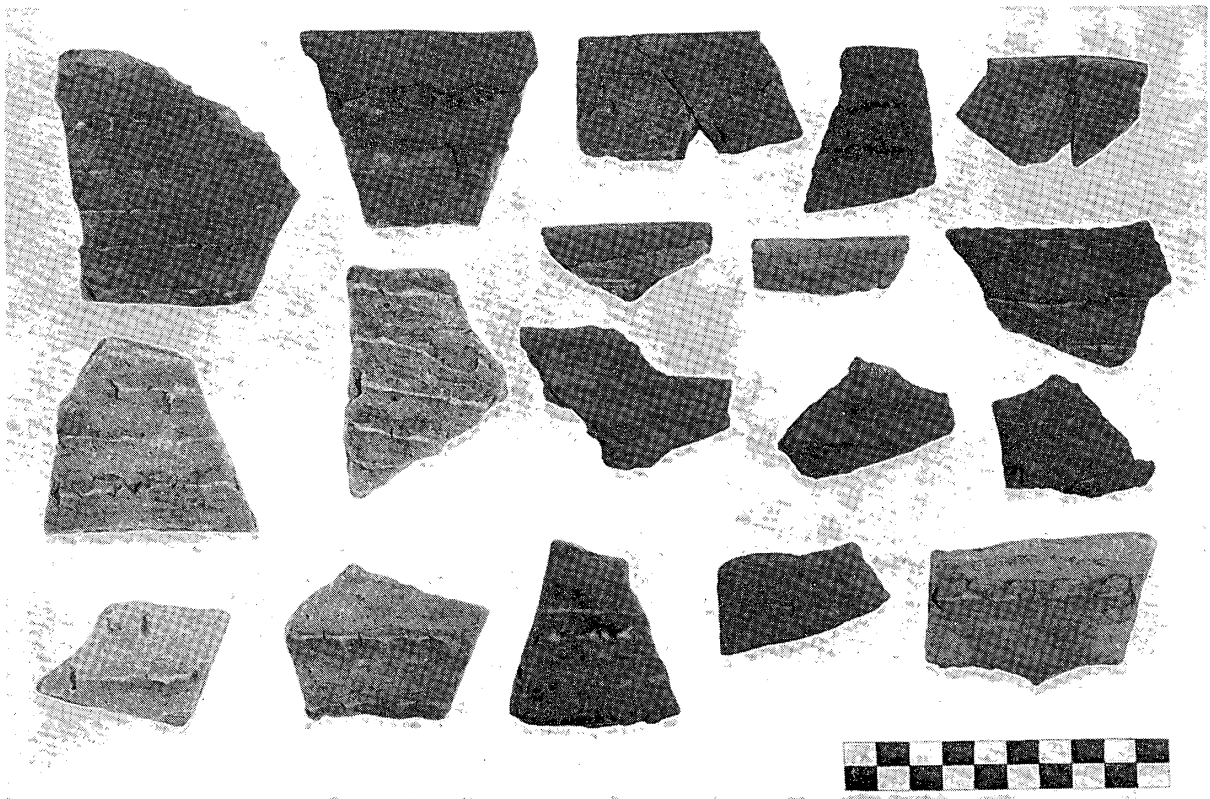
図版 1 額拉蘇C出土の土器（1）



図版 2 額拉蘇C出土の土器（2）

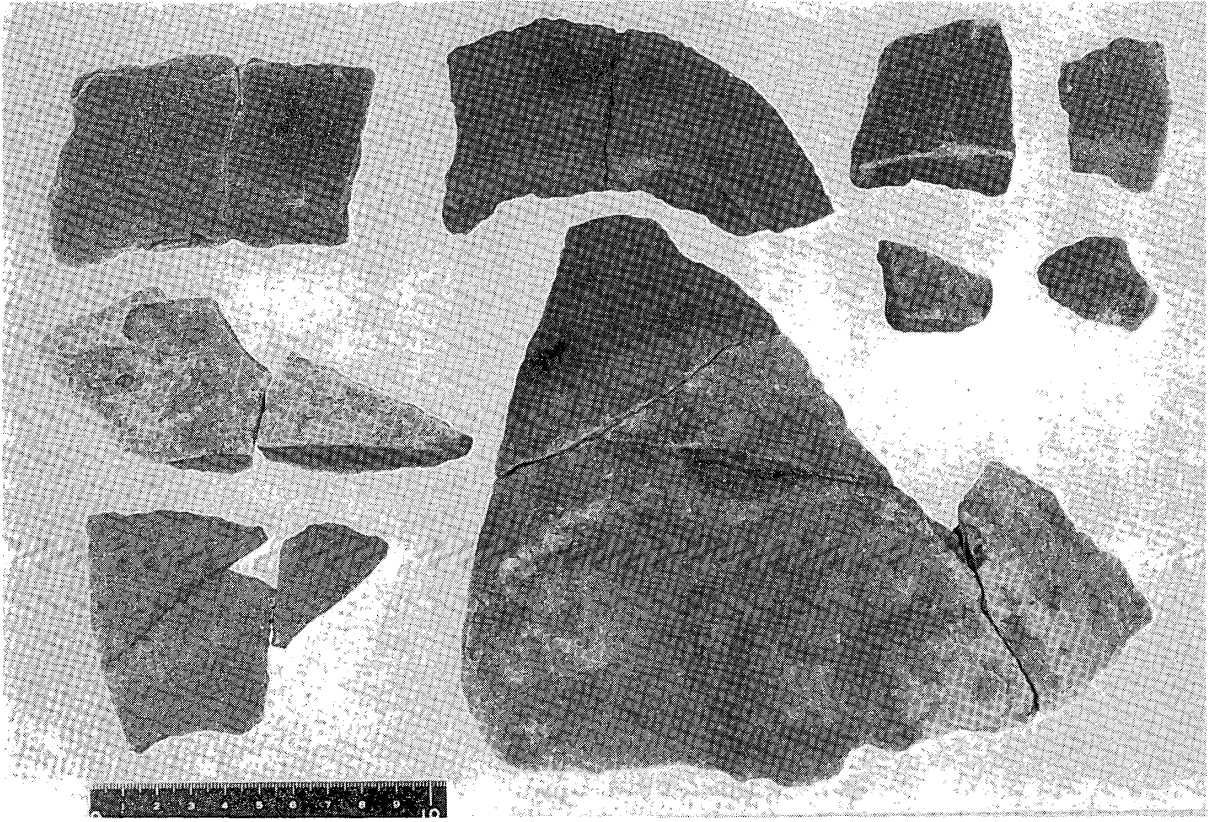


図版 3 額拉蘇C出土の土器 (3)

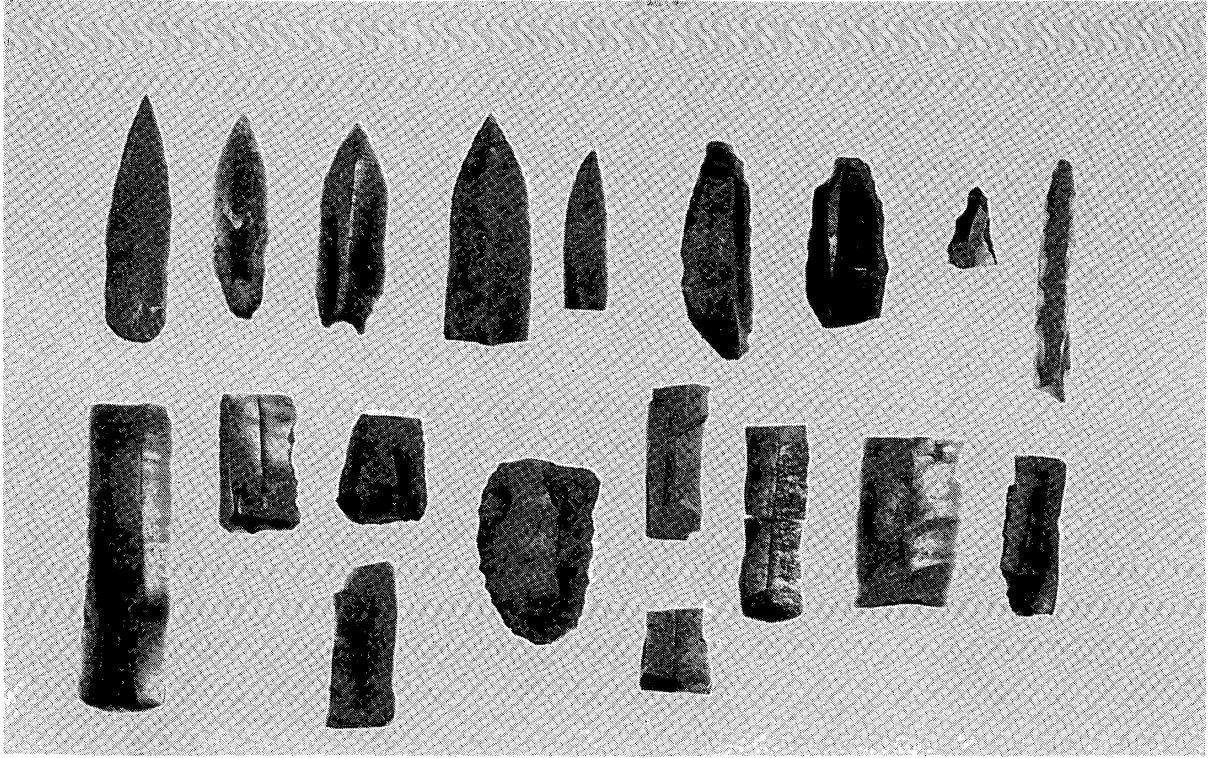


図版 4 額拉蘇C出土の土器 (4)

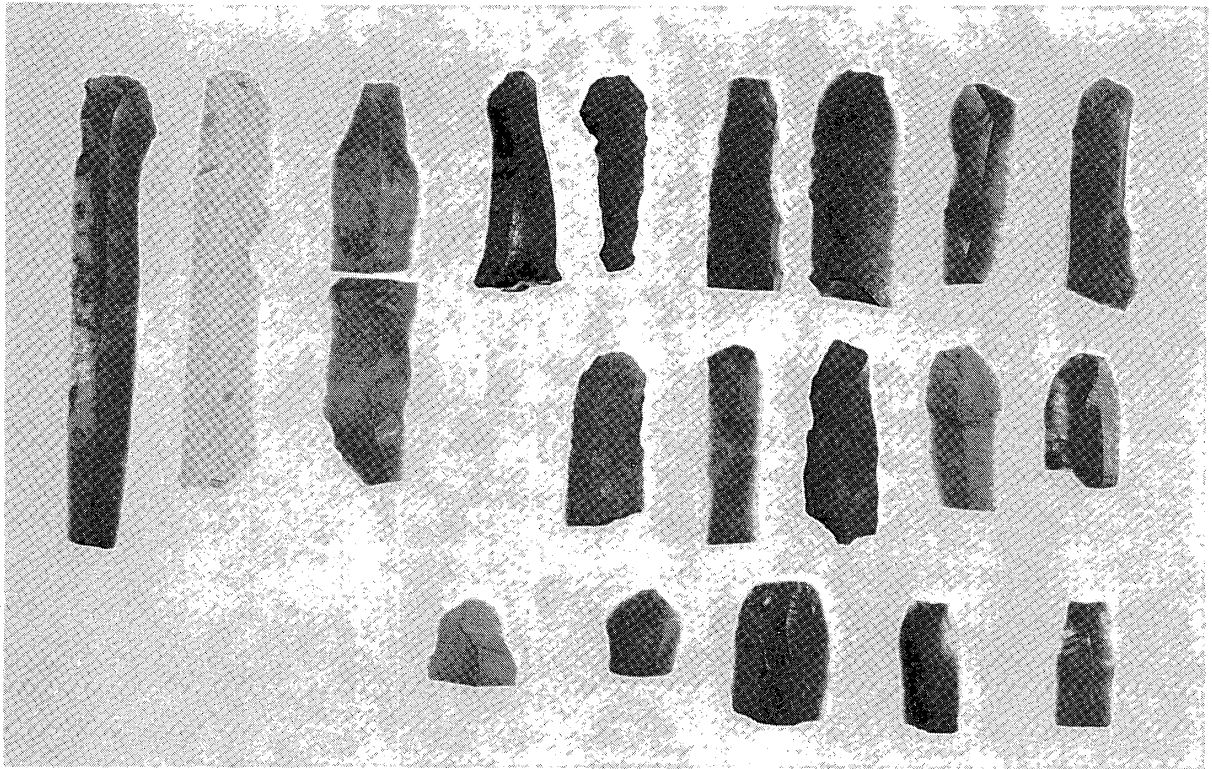
昂々溪採集の遺物について



図版 5 額拉蘇C出土の土器(5)



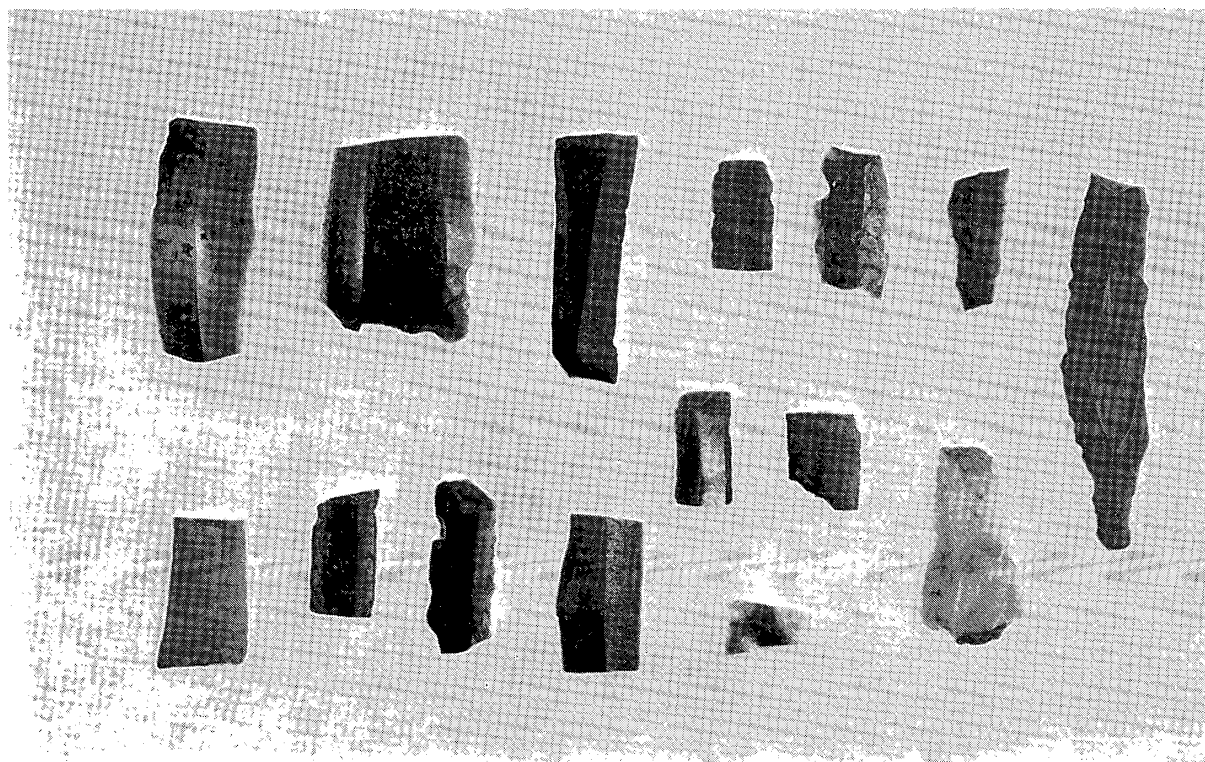
図版 6 額拉蘇C出土の石器 (1) (約 7/8)



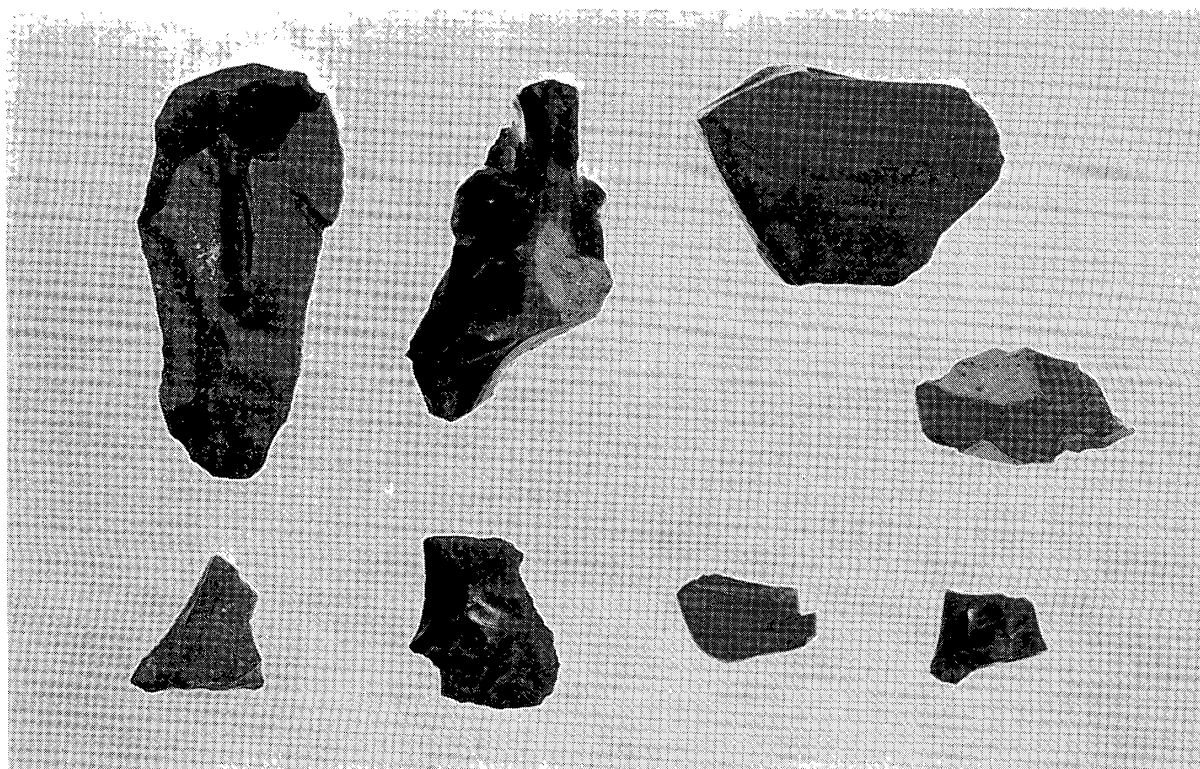
図版 7 額拉蘇C出土の石器 (2) (約 7/8)



昂々溪採集の遺物について



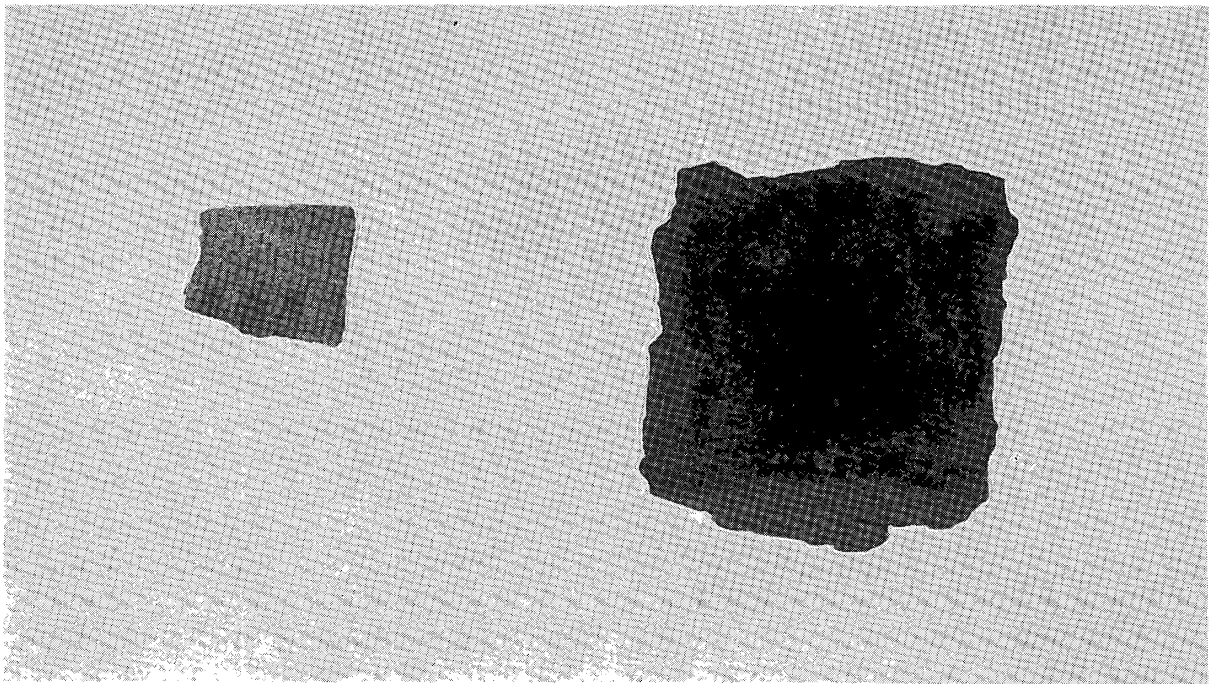
図版 8 額拉蘇C出土の石器 (3) (約 7/8)



図版 9 額拉蘇C出土の石器 (4) (約 7/8)



図版10 額拉蘇C出土の土製品（約 1/1）



図版11 五福A採集の土器（約 1/1）

昂々溪採集の遺物について



図版12 五福A他採集の石器（1）（約 7/8）



図版13 五福A他採集の石器（2）（約 7/8）